

高知県香南市発掘調査報告書 第13集

きしもと あすか じんじゃにし

# 岸本飛鳥神社西遺跡

— 岸本1区津波避難タワー整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2016.3

香南市教育委員会

きしもと あすか じんじゃにし

# 岸本飛鳥神社西遺跡

— 岸本1区津波避難タワー整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2016.3

香南市教育委員会



岸本飛鳥神社西遺跡 東から



岸本飛鳥神社西遺跡 西から



岸本飛鳥神社西遺跡 南から



岸本飛鳥神社西遺跡 調査区

## 序

太平洋に臨む香南市の南部には見事に発達した砂堆が形成されています。今では見ることができませんが、香我美町岸本にはかつて松林が砂堆を覆うようにしてあったと聞きます。文字どおり白砂青松、そのものの景観があったことでしょう。古来人々はこの砂堆の上を行き交い、生活の場としてきました。その中で育まれてきた文化はこの地域独特のものであり、似たような環境に発達した文化にも同一のものは見ることができません。失われてしまうと再び取り戻すことができないもののひとつなのでしょう。生物種の多様性が失われつつあることは今日よく謳われています。同じように恐らく文化の多様性が失われることが人々の未来により結果をもたらすとは考えられないのです。

今、砂堆の後背地は潟湖から耕作地へと姿を変え、砂堆上には道路や鉄道が敷設されています。加えて、人々のよりどころとするべき海との接点である海岸線には巨大な防波堤や波消しブロックが造られています。人々の暮らしや周りの環境は大きく変化してしまいました。しかし、今もおこの砂堆の上には生活が営まれ、これからも次世代に引き継がれて行くべきで、これはその地域に暮らす人々だけの問題ではなく、我々人類に関わる問題でもあると思います。

今回の調査は、津波避難タワーの整備に伴う発掘調査であります。2011年3月11日午後2時46分に発生した東北地方太平洋沖地震では、巨大な津波が東北地方のみならず多くの地域を襲い甚大な被害をもたらしました。土佐湾岸でも、南海や東南海地震で発生する津波が来襲するでしょう。その被害から命を守り、地域を復興させることは、地域の人々は無論のこと、同時代を生きる人々の意志であり、先人達の願いではないでしょうか。

最後になりましたが、調査に際しましては、周辺にお住まいの方々始め多くの皆様にご協力頂きました。深く感謝いたします。

平成28年3月

香南市教育委員会  
教育長 安岡 多實男

## 例言

- 本報告書は、平成27年度津波避難タワー整備に関わる岸本1区の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 遺跡は、香南市香我美町岸本にあり、岸本飛鳥神社の香宗川放水路を挟んだ西側に位置している。住所は香南市香我美町大字岸本リ/丸311-10他である。また、調査面積は約200㎡である。
- 試掘調査は、主に南北道路部分の調査を平成27年1月5日から1月8日まで行い、本体部分を平成27年5月14日から5月18日まで行いました。  
本調査は平成27年5月19日から6月19日まで行いました。  
(現地説明会を6月15日に行いました。)
- 調査に於いては、香南市民、特に岸本地区や赤岡町、調査区に隣接する住民の方々に便宜を図って頂きました。紙面を借りて厚くお礼申し上げます。
- 調査に於いては、香南市防災対策課・香南市立岸本小学校・香南市立香我美市民館・香南市文化財センターの方々のご協力を頂きました。紙面を借りて厚くお礼申し上げます。
- 調査区の堆積状況については、南北トレンチの南端で下層の砂層を含めて地表下約2mを対象とした地層剥ぎ取りを高知大学の自然科学系教授(地質学)の近藤康生氏や准教授の奈良正和氏等の協力のもとに行いました。また、堆積状態について丁寧な御教授を頂きました。感謝致します。尚、剥ぎ取りした土層の分析については、今後の砂堆の調査結果をも踏まえて総合的に判断する必要があり、課題としておきます。
- 調査区から出土した自然遺物(貝類)については、土佐市教育委員会の池田 研氏に助言を頂きました。紙面を借りて厚くお礼を申し上げます。
- 調査区の堆積土や出土遺物のうち土器の色調については、『新版 標準土色帖』2005年版を用いました。
- 試掘並びに発掘調査では、河村美佐子・宗圓良一・川村正廣・植田秀夫・永野宏幸・清藤勝秀氏のご協力を得ました。紙面を借りて厚くお礼を申し上げます。
- 整理作業では、宮本幸子・澤田佐世・齋藤美幸各氏の協力を得ました。紙面を借りて厚くお礼申し上げます。
- 調査時には、岸本小学校の3・4年生(11名)に現地を見て頂きました。また、悪天候のため教室内で、6年生(7名)を含めて岸本飛鳥神社西遺跡出土遺物の説明をする時間を持つことができました。また、こういった機会を創って頂いた関係者の方々にも紙面を借りて厚くお礼申し上げます。
- 航空写真は、香南ケーブルテレビの協力の下に撮影することができました。紙面を借りて感謝致します。
- 地形図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図をもとに使用しました。
- 平面図・断面図は、香南市文化財センターが測量した20分の1等の測量図を縮小・拡大して使用しました。

- 遺物図は、香南市文化財センターが作成した遺物実測図を3分の1に縮小して使用しました。
- 出土遺物の注記には、岸本飛鳥神社西遺跡の平成27年度調査番号「15-1AN」を使用しています。



## 目次

### 本文目次

	頁
第1章 環境	1
第2章 調査に至る経過	5
第3章 調査の経過	6
第4章 調査の成果	
1. 試掘調査	7
2. 基本層準	13
3. 遺構と遺物	15
4. まとめ	47

### 挿図目次

図 1. 岸本飛鳥神社西遺跡の位置	2
図 2. 岸本飛鳥神社西遺跡の周辺	3
図 3. 岸本飛鳥神社西遺跡の調査対象地 (S=1/3,000)	5
図 4. 試掘調査の位置 (S=1/400)	8
図 5. 試掘調査 調査坑柱状図 (S=1/40)	9
図 6. 試掘調査 土坑断面図 (S=1/40)	9
図 7. 試掘調査 調査溝断面図 (S=1/80)	11
図 8. 試掘調査 遺物図T-1~T-11 (S=1/3)	12
図 9. 調査区 断面図 (S=1/60)	14
図10. 遺構配置図 (S=1/200)	23
図11. 遺構図SK1・2 (S=1/40, 1/30)	24
図12. 遺構図SK3・4・5・6 (S=1/40)	25
図13. 遺構図SK7他 (S=1/40)	26
図14. 遺構図SK8他 (S=1/40, 1/20)	27
図15. 遺構図SK9・18・19・20 (S=1/40)	28
図16. 遺構図SK10・11他 (S=1/40)	29
図17. 遺構図SK12・13・14・15 (S=1/40)	30
図18. 遺構図SK16・17 (S=1/40)	31
図19. 遺構図P10他 (S=1/40)	32
図20. 遺物図1~13 (S=1/3)	33
図21. 遺物図14~29 (S=1/3)	34



図22. 遺物図30~47(S=1/3) .....	35
図23. 遺物図48~64(S=1/3) .....	36
図24. 遺物図65~80(S=1/3) .....	37
図25. 遺物図81~102(S=1/3) .....	38
図26. 遺物図103~112(S=1/3) .....	39
図27. 遺物図D-1~D-7, M-1~M-4(S=1/1) .....	40
図28. 遺構の時期 .....	48
図29. 調査区内の堆積 .....	50

### 表目次

表 1. 遺物観察表 1(試掘調査) .....	12
表 2. 遺物観察表 2 .....	41
表 3. 遺物観察表 3 .....	42
表 4. 遺物観察表 4 .....	43
表 5. 遺物観察表 5 .....	44
表 6. 遺物観察表 6 .....	45
表 7. 遺物計測表(土製品・銅銭) .....	45

### 写真図版目次

巻頭図版 1	
巻頭図版 2	
PL. 1 遺構写真	1
PL. 2 遺構写真	2
PL. 3 遺構写真	3
PL. 4 遺構写真	4
PL. 5 遺構写真	5
PL. 6 遺構写真	6
PL. 7 遺構写真	7
PL. 8 遺構写真	8
PL. 9 遺構写真	9
PL.10 遺構写真	10
PL.11 遺構写真	11

PL.12	遺構写真	12
PL.13	遺構写真	13
PL.14	遺構写真	14
PL.15	遺構写真	15
PL.16	遺構写真	16
PL.17	遺構写真	17
PL.18	遺構写真	18
PL.19	遺構写真	19
PL.20	遺構写真	20
PL.21	遺構写真	21
PL.22	遺構写真	22
PL.23	遺物写真	1
PL.24	遺物写真	2
PL.25	遺物写真	3
PL.26	遺物写真	4
PL.27	遺物写真	5
PL.28	遺物写真	6
PL.29	遺物写真	7
PL.30	遺物写真	8
PL.31	遺構写真	9
PL.32	遺構写真	10

## 第1章 環境

### 砂堆の形成

嘗ての香南市の太平洋岸には、内湾する入りくんだ海岸地形があり、外洋部分との境には砂州状の地形が形成されたのでしょ。香宗川河口の閉塞や潟湖の出現を経て今日の景観は創り出されたと考えられます。現在、物部川の河口から東側、吉川から夜須に掛けて明瞭な海岸堤防が見られます。その規模は幅数100mにも達し、海面からの高さも部分的には10m程度にまで成長しています。砂堆の構成要素である砂は、河川から供給される砂礫を起源とするもので、河口を経て海までもたらされ、沿岸流などの運搬作用によって移動し、海岸線の近くで運搬力を失い堆積します。土佐湾岸でも河川にダムなどが建設される以前には、海岸線のやや沖の海面下に砂堆が形成されていたとされ、これが海岸に打ち上げられる砂の供給源であったとされています。赤岡から岸本に掛けて形成された砂堆の幅が西側で広く、東へ幾分減少し、高さも低くなる様を考えると、沿岸流の向きや地形の影響は西側の砂堆の発達に有利であったと考えられます。また、土地条件図によると赤岡町の南町や本町には砂堆の形成が未熟な部分が見られ、鞍部となっています。東側の岸本辺りではそれは不明瞭で厚みのあるひとつの丘を造り上げています。砂堆形成の時期差について、甲元眞之氏等の研究によると、砂丘の形成には気候の影響が大きく、温暖傾向の時期に砂の供給が増え砂丘が発達し、寒冷傾向の時期には植生の発達による土壌化が卓越するとされています。この痕跡は遠浅の海岸に顕著に見られ、内陸側に古い時期の砂丘が形成され、沖側へと新しい砂丘が造られます。その狭間に砂丘の未発達な部分があるとするので、比較的明瞭な三つの形成時期が存在すると云われているのです。同氏の分析では、波打ち際から海底が深く沈降する海岸では、砂丘の形成が重なり合い、明瞭な時期差を残さない傾向にあるとされています。本地域の砂堆についても詳細な形成過程をとらえるにはもう少し時間が必要でしよ。

### 街路の形成

ご存知のように、現在の岸本や赤岡の街は砂堆の上を中心に形成されています。昔も人や物の動きを司るものとして砂堆があったと考えられ、やがてここに街が形成されたと考えられます。

内陸に形成された道は直接川や海からの影響を受けることが少なく、峠越えなど標高差はあるものの直線的に目的地に向かうことが可能で、比較的短い時間での通行が期待できます。一方、海岸を辿る道は入りくんだ地形や気象の影響を受けますが、起伏の少ない平坦な道を辿ることができます。平野に形成された海岸堤防や自然堤防上の道は、それぞれの長所を合わせ持った道と言えるかもしれません。水の影響は甚だしいものがありますが、安定すれば直線的に目的地に向かうことが可能で、しかも平坦で広々とした景色が道の周りには広がっていた筈です。現在の国道は岸本の集落を迂回するように海岸側に敷設されていますが、旧国道で現在も赤岡から岸本を貫く県道は生活道として今も地域にとって重要な道であることに変わりはありません。この道は高知方面と安芸方面を結ぶ嘗ての街道を踏襲したものと考えられます。恐らく、近世から繋がる赤岡と岸本の街並みの形成にも深く関わりを持ったものでしよ。この県道は、東西に発達した赤岡の街の中心を通り、東に向かって直線的に延び、現在の岸本小学校の辺りから緩やかに南に向かって、旧村役場前からは更に大きく曲がっています。ここで東方の月見山下

から直線的に西に延びた道と交わります。岸本の東部(宇田町)は、直線的な東西方向の街路を軸に、東から発達したものと考えられます。それは中世姫倉城(4)下に形成されたものかもしれません。対して、岸本の西部(新町)は、赤岡の直線的な街路の延長として形成されたもののように思われます。言い換えると、現在の岸本西部の街並みは道がここに固定されてから形成されたと言って良いのでしょうか。

赤岡の街には、もう一つ東西方向の道があります。先の県道の北側で、現在の赤岡小学校前を通る東西路です。この道は江見町付近で途切れて、東側へは繋がっていません。地図上で見ると、この道は直線的には飛鳥神社の辺りを通り、先述した月見山からの直線路と繋がるような方向性を持った直線路なのです。

赤岡に於ける二つの東西路は方向が異なることから、敷設時期が異なると考えられます。南側の道は北側の道に比べて砂堆の外側に位置し、しかも標高も高い場所にあることから時期的には新しいものと考えられます。

二つの地点を繋ぐ形で道が出来上がる時、途中で障害物が無ければ直線的に短い距離を結んで造られる筈です。海岸堤防など水の影響が強い地域では、より高い位置が選択されたことでしょう。すると、



図1. 岸本飛鳥神社西遺跡の位置

岸本と赤岡の間には、元々繁ぐ道はなかったのでしょうか。あるいは、既設の道が何らかの影響で使えなくなったとも考えられます。その原因としては、不十分な砂堆の発達や津波などの災害による影響が考えられます。何れにしても、現在の県道の祖型となる道の敷設には西からの強い影響があったのでしょうか。

#### 飛鳥神社と周辺の遺跡

赤岡町江見町では古墳時代初めの土師器が出土しています。これは井戸の掘削に際して地下約4mから出土したものです(11)。丘陵の南側で発見された花宴遺跡(9)では弥生時代終末から古墳時代の流路が検出されています。このことを考えれば、当時の集落が丘陵部分に存在し、香宗川などの河川を通して海と結ばれていた可能性が指摘できるでしょう。

徳王子周辺には先述した花宴遺跡の他に、徳王子大崎遺跡(6)、徳王子広本遺跡(7)、徳王子前島遺跡(8)などが丘陵の末端に存在しています。また、丘陵部分には徳善天皇古墳や徳善城跡(5)があることから、古墳時代の終わりから古代にかけて地理的に重要な場所であった事を窺わせています。



図2 岸本飛鳥神社西遺跡の周辺

若一王子宮<sup>(10)</sup>は熊野神社の勧請を受けて成立したとされています。时期的には、弘安元年(1278)以前と考えられています。神社の位置は内湾した地形に対峙した丘陵部の末端にあり、上述した時期よりも遙かに遡る遺跡群が周辺に存在していることを考えるならば、社の成立は古く、更に信仰の対象地として現れる時期も更に遡る可能性があります。

飛鳥神社<sup>(11)</sup>は南路志には若一王子宮の御旅宮としての記載が見られます。飛鳥神社は若一王子宮の参道から八丁道と呼ばれる直線路を南に下った海岸に嘗てもあった筈です。この道は長宗我部元親が“神幸道”として建設したもので、現在も飛鳥神社の北の路傍に神輿体が残されています。徳王子付近の土地区画はかつての条里地割りを踏襲するものですから、道の整備以前に社がこの場所にあった可能性も考えられます。

### 地震と津波

南四国と自然災害はどうしても切り離す事はできません。百年に一度とされるプレート境界を震源とする巨大地震を除いても、集中豪雨や台風など、または遠く太平洋を隔てた地球の裏側で起こった地震による津波が突然沿岸部に押し寄せる場合もあります。記録として残されていないだけで多くの災害を経験したであろうことは想像に難くありません。情報伝達の整備や対策がある程度とられた現在でも尚、これらの災害が脅威であることに変わりはありません。

巨大地震と津波に関わる記録は、江戸時代に至って多くの文字として残されています。特に宝永年間と安政年間に発生した地震と津波の発生状況や被害を記録したものには、私的なものから公的なものまで多くが存在しています。各町村史に収められたそれら記述の一部から、規模の大きさを窺い知ることができます。

『徳志』(P.56)は、岸本にある飛鳥神社の境内の石碑に刻まれています。安政の地震や津波発生時の模様や避難する人々の様子、そして被害の状況を記録した石碑です。被災した各々の集落には、災害を後世に伝えようとした物やことばが、当時は今よりも多く残されていた筈です。もの言わぬ石に言葉を語らせるには想像力が必要です。今回整備される津波避難タワーは無論住民の尊い生命を守るためのものではありませんが、来る地震と津波にどう向き合うのかを問う碑(いしぶみ)でもあります。

### 参考文献

- 甲元真之『環境変動と考古学研究』『考古学研究62-3』考古学研究会 2015年
- 保阪直紀『地震と津波の物理』講談社 2015年
- 上森千秋『流れと波の科学』財団法人 高知市文化振興財団 1990年
- 松本安紀彦『クノ丸遺跡』(財)高知県文化財埋蔵文化財センター 2010年
- 下村裕・小野山香・廣田佳久『花宴遺跡』(財)高知県文化財埋蔵文化財センター 2010年
- 『南路志 2』高知県立図書館 1994年
- 『南路志 3』高知県立図書館 1994年
- 『長宗我部地検帳 香美郡 上』高知県立図書館 1962年
- 『香我美町史』香我美町 1985年
- 『歴史探訪 南海地震の碑をたずねて 石碑・古文書に残る津波の恐怖』毎日新聞社高知支局 2002年



## 第2章 調査に至る経過

平成26年12月に岸本1区津波避難タワー整備に関わる協議の要請が香南市防災対策課からあり、協議の結果平成27年1月にタワー建設用地と西側に整備される南北道路に関わる試掘調査を行うこととなった。

岸本地区で今までに本格的な発掘調査が行われたのは、岸本集落東端の見見山下に当たるタノ丸地区であり、この調査も決して広い範囲で行われたものではなかった。砂堆の上に展開する集落については文献資料に頼らざるを得ない。高知県下でも砂堆上の遺跡調査が事例として少なく、特に規模の大きな砂堆の形成や遺跡の存在に関わる調査例は無いに等しい。地形的に砂堆は比較的早い段階から部分的にはあれ水から切り離されていて、人々の生活の場や交通の拠点となっていたことが窺える。地理的には重要な部分と考えられる場合も多く、例えば鳥取県北条町の日本海岸に横たわる砂丘上では、集落跡や生産址など重層的な生活の場が発見されている。太平洋に臨む岸本・赤岡の砂堆で営まれたであろう生活はそれ自身が本県を特徴付けるものと考えられる。残念ながら現在まで香宗川放水路や国道の敷設など開発を契機とした大規模な調査が実施されていないことから、資料の蓄積が乏しいのが現状である。また、岸本地区の街並みについては近世・近代の文献資料に負うところが大きく、『長宗我部地検帳』などに記載された内容の土地利用との違いなど、それらを補完する意味でも調査成果を期待できる。加えて、対象地に程近い赤岡町の江見遺跡では古式土師器が出土しており、これらとの関係を明らかにできるであろう。

試掘調査は平成27年1月5日から1月8日まで行った。詳細は後述するとして、南北道路部分とタワー本体部分について、この期間にテストピットと南北方向のトレンチを設定した。本体部分では近現代の攪乱が多く、文化層や遺構の存在が不明であったことから、平成27年4月以降に再び調査を実施することとした。

試掘調査を平成27年5月14日から5月18日まで行い、近現代の遺構と共に先行する時期の遺構や遺物を発見したことから平成27年5月19日から6月19日まで本調査を行った。

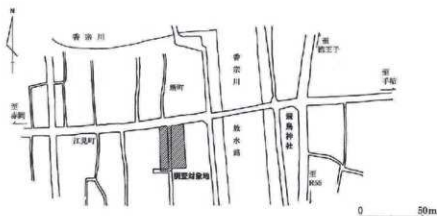


図3. 岸本飛鳥神社西遺跡の調査対象地 (S=1/3,000)



## 第3章 調査の経過

試掘調査は平成27年1月5日から、津波避難タワー本体部分の西側に整備される南北道路の予定地において、南北それぞれに一ヶ所（TP1とTP2）を設定して始められた。旧国道（街道）沿いの北側に設定したTP1からは、北東隅角を中心に約1mの範囲で遺構（土坑）を検出している。また南側に設定したTP2では西壁に土廣状の遺構を検出した。遺構は砂層にまで掘り込まれた遺構で、砂層起源の埋土を持つ。検出は断面の精査による。特にTP1の土坑は遺構規模が底部まで1m30cmの深さを測り、床面には粘土の堆積が存在していた。まるで素掘りの井戸のようであった。TP2の遺構も断面精査で見つかった遺構で、西側は調査区外に及んでいる。全体の規模は把握できていないが、薄い下弦の炭化物層が下位に存在していた。

本体部分については対象地の東半部に南北トレンチを設定し、また北半部に東西トレンチを設定し調査を行った。南北トレンチでは多くの部分でコンクリートのブロックや瓦、ガラス、スレート、タイル等の遺物が表土や盛り土の下から掘り込まれているのが確認されている。このような後世の影響を受けながらも、部分的に表土化した堆積層や下位の砂層に達するような深い柱穴状の掘り込みは残されていた。詳細は次章に譲るが、これら表土化した堆積層や掘り込みには遺物は殆ど見られなかった。また、この下位の砂層には人頭大、それ以上の円礫が存在しており、これらが遺構と関連するものか不明であった。

平成27年5月14日からは東西トレンチの調査を実施した。東西トレンチは南北トレンチほど後世の影響が少なく、比較的安定した堆積状況が見られた。表土、盛り土の下に腐植の混じった堆積層が約二面存在している。この二層は上述の南北トレンチの南寄りでも確認できた。このことから、旧表土と考えられる堆積層は後世の改変がなければ標準的に調査対象地で見られたものと考えられる。旧表土群の下には砂層を起源とした土湿りの締まりの良い堆積層が残されており、柱穴状遺構や落ち込みがこの層を埋土として有しているのが判る。これら表土の形成時期と遺構等の性格が分かれば、周辺集落形成や街路等の初現が何時に成るのか明確にできると判断し、本調査を実施した。なお、後世の改変による混沌とした状況を回避する為に、最下位の厚い砂層の上面で遺構検出を行なった。

本調査は平成27年5月19日から試掘調査に引き続き実施した。津波避難タワー本体の建設予定地について北側から順次表土等を排除して遺構の検出を行った。調査区を便宜上北と南に分け、現代等の新しい遺構についても可能な範囲で調査を実施し、先行する時期の遺構の存在を確認しながら調査を進めた。

平成27年6月19日には調査区の埋め戻しを行い、調査を終了した。

調査の終了に際しては、岸本小学校で3・4年生と6年生に岸本飛鳥神社西遺跡の成果について話す機会をつくって頂きました。熱心な質問に少々閉口し、冷や汗をかきながらも楽しい時間を持つことができました。また、現地説明会では、歴史研究家の野村土佐男氏や高知大学の近藤康生氏の協力を得て、周辺住民の方々に、歴史および自然環境に触れて頂くことができました。

## 第4章 調査の成果

### 1. 試掘調査

#### TP1

平面図は図4～6(P8・9)、遺物図は図8(P12)、写真PL.31

津波避難タワー建設予定地の西側に敷設される南北道路部分の北側に設定したテストピットである。東西方向は約2m、南北方向に約3mの範囲で主に調査予定地の堆積状況を確認する目的で掘削を開始した。まず、10cm程度の厚さで盛り土が存在した。灰色の角礫を含んだ土である。その下に15cm程度の厚さで砂質の灰色土が存在している。一部には焼土や炭化物の薄い層が存在していた。下位に向かうと灰色砂層が厚く堆積しており、TP1の中央から東にかけて多くは無いが近世陶磁器の出土が散発的に見られた。後に断面の精査でTP1の北東隅に土坑の一部が懸かっていることが判ったが、平面形態は不明であった。TP1の西壁ではこの層の中位から上位に欠けて北へ向かって層厚を減じながら緩く上る粘性土の薄い堆積が認められた。地表下約1m20cmで粒径の大きな砂や小礫が主体となり、礫層と砂層の互層も見られ、やがて粒径10～20mmの礫層も出現する。地表下約2m20cmで掘削を終了した。

上述のようにTP1では単独か、複数の土坑を一部ではあるが検出している。上位と下位で土坑の様相が異なることから推して、先行する深い土坑があり、これが完全に埋積される直前に上の浅い遺構が機能し廃絶されたものと考えられる。上位の土坑は薄い炭化物層の形成の後、粘土、焼土などを埋土としている。人為的な埋積であり、これらの埋土は概ね北側からもたらされたものであろう。下位の土坑には、比較的早い段階での堆積と考えられる粘質土が存在している。土坑の下半は砂層を掘り込んでおり、水の関与する堆積環境を考えさせる。土坑の規模は開口部が幅約2m、深さは下位の土坑が表土から1m50cmを測り、上位の土坑は表土から約60cmを測る。

出土遺物は、磁器の染付皿(T-4)、陶器の呉器形碗(T-5)、陶器の銅緑釉皿(T-3)、陶器の灰釉碗(T-1)、陶胎染付の碗(T-2)を図示した。他には、陶器の鉢(刷毛目)、甕(タタキ)、瓦、魚骨、貝殻(二枚貝、巻貝)、漆喰と須恵器の坏、土師器の甕、製塩土器などがある。廃棄的な性格を持つものか。下位土坑では最下層の堆積土から陶磁器(波佐見産の皿と呉器形の碗)が出土しており、18世紀代の機能時期が考えられる。

#### TP2

平面図は図4～6(P8・9)、遺物図は図8(P12)、写真PL.31

TP2は調査対象地の西南部、南北道路敷設地の南端に設定したテストピットであり、東西方向2.5m、南北方向4.6mである。10cm程度の盛り土の下には旧表土であろう暗灰色土があり、耕作に関わった土であろうか細かい粒子で構成される土層も確認される。TP1では一つの厚い堆積砂層として記録した灰色砂層はここでは上位と下位でやや構成する砂粒の大きさに違いが認められた。上位は細砂、下位は粗砂で構成されている。地表下1m30cm以下では砂礫層に遷移している。

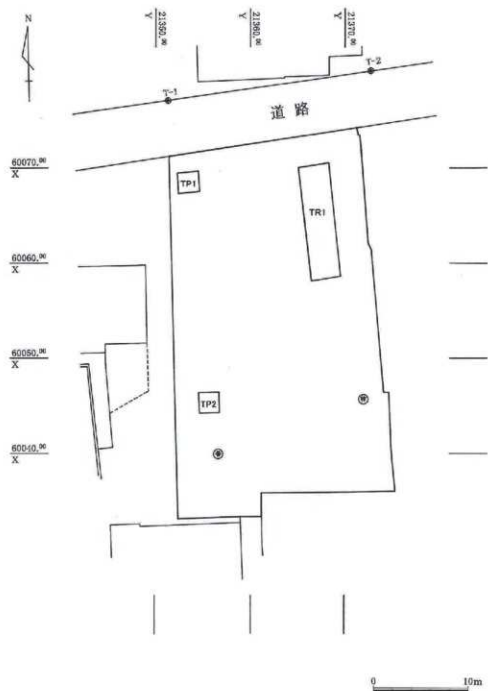


図4. 試掘調査の位置 (S=1/400)

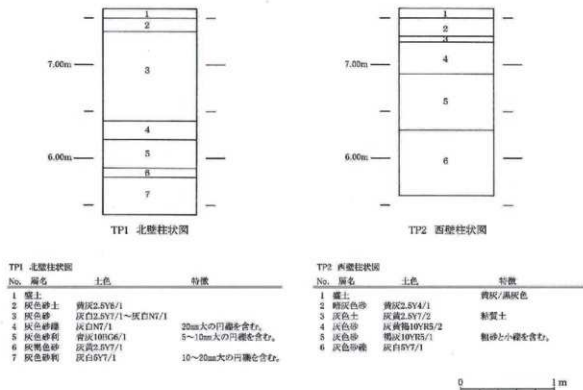


図5. 試掘調査 調査坑柱状図 (S=1/40)

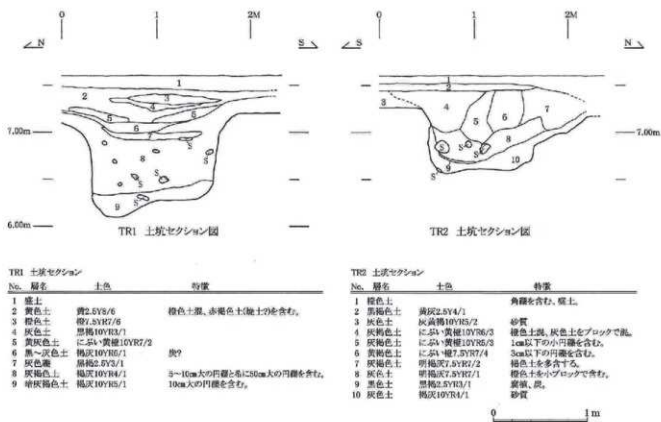


図6. 試掘調査 土坑断面図 (S=1/40)

TP2の西壁北側で土坑が確認されている。規模は開口部が幅約2m、底部では幅約80cmであり、深さは検出面から約1mを測る。土坑は比較的短時間に埋め戻された可能性が高い。下位には腐植による薄い炭化物層が存在し、緩やかに下方に窪み弧を描く。

出土遺物は、陶器の皿(T-6)と土鍾(T-7)を図示した。他には、磁器の染付碗、染付徳利、小皿(波佐見産)、陶器の瓶、灰落し、瓦、貝殻、漆喰などがある。

#### TR1

遺構図は図4・7(P8・11)、遺物図は図8(P12)、写真PL.31

津波避難タワー本体の整備予定地では東部に南北方向長さ約14m、幅約4mの調査溝を設定する。掘削は北側から開始し、崩壊を考慮して壁面に傾斜を与えた為、溝底面は約1mの幅とした。盛土の直下から下層へ多くの土坑が存在するが、多くはコンクリートブロックや瓦片を多量に含んでおり、近・現代の掘削坑と考えられる。それらの土坑は北側で卓越する状態にあり、調査区の標準的な堆積は明確ではなかった。況してや、集落の成立時期に関わる遺構の発見などは論外のように思われた。調査を南に進めるに従い、比較的後世の改変の少ない安定した堆積が認められた。盛土または現在の表土が黒灰色または黒褐色を呈して存在しており、層厚は10cmから15cmを測る。旧表土と考えられる暗灰色から暗灰褐色の堆積層が層厚20～30cmで2層確認できる。TR1の南部ではこのふたつの層の間に明らかな間層が入っている。表土下の深さにして約1m30cmから調査溝底の1m50cmまでには形成時期不明の灰色砂層が存在している。TR1の東壁では明らかでは無いが西壁の灰色砂層上位に層厚10cm程度で縮まりのある明灰褐色土が認められ、それは幾つかの場面で下位の砂層に影響を及ぼしている。調査溝の壁面では明らかに近現代のものと考えられる遺構を除いて、落ち込みなどの時期や性格を明らかにすることはできなかった。調査対象地の北寄り、県道に近い場所では後世の影響が大きいことを示している。南に寄るに従い徐々に堆積環境が保存されていることからすると、中央部分でも状況によっては集落の起源に関わる遺構や遺物が発見される可能性があることと試掘調査の終了段階で判断した。

TR1の調査に際しては、調査溝の南端で高知大学理学部の協力を得て下層の堆積状況の精査と土層剥ぎ取りを行うことができた。TR1等に於いて確認した下位の灰色砂層は当初風成層ではないかと考えていたが、近藤氏や奈良氏の指摘では海成、波の影響に因る可能性が高いというものであり、果たしてその形成過程はどのようなものであったのか。また、その時期はいつ頃なのか。今後の調査に於いてはこれを一つの課題とするものである。

出土遺物は、土師器、須恵器、土師質土器、近世から近現代の陶磁器、瓦、鉄製品、貝殻、ガラス瓶、砥石、万年筆、タイルなどが出土している。このうち図示したのは、磁器の碗(T-9)、陶器の播鉢(T-8)、土師質土器の焜炉(T-10)、砥石(T-11)である。

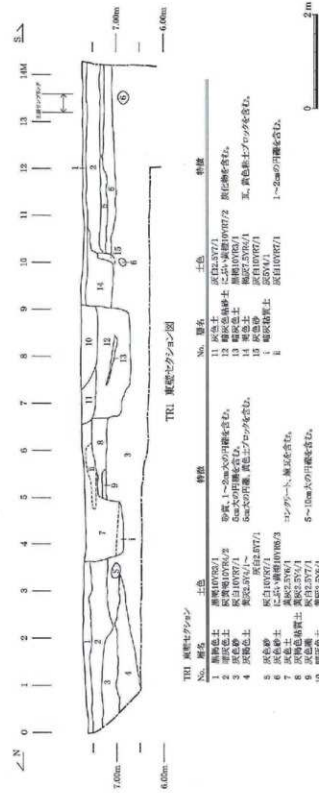
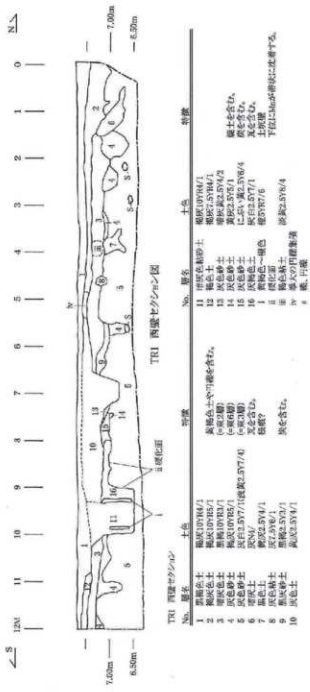


図7. 試掘調査 調査断面図 (S=1/80)

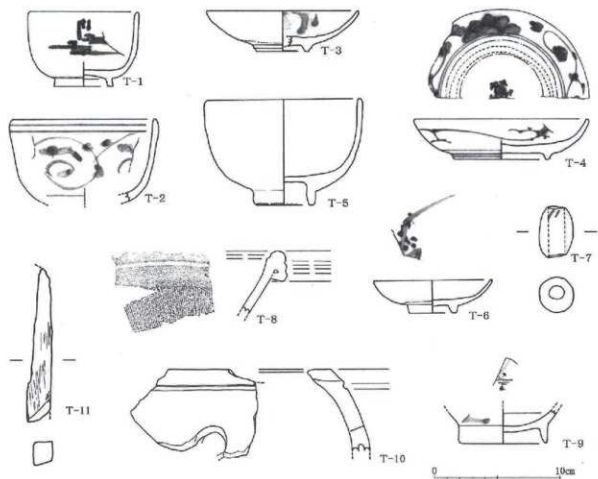


図8. 試掘調査 遺物図 T-1~T-11 (S=1/3)

表1. 遺物観察表1 (試掘調査)

図 No	出土地層	器種	器形	部位	法量 (cm)				特徴	形態・文様		色 測			備考
					口径	器高	胴径	底径		内面	外面	内面	外面	断面	
T-1	TP1	陶器	碗		7.4	5.9	4.8		煎茶碗	灰緑、帆掛舟 (鉄絵)	灰緑、 (底)磨胎	浅黄 2.5Y7/4	にぶい黄 2.5YR6/4	灰白 2.5Y8/2	
T-2	TP1	陶器	碗	口縁	11.2	(7.0)			陶胎染付	蔓草?	灰 10Y6/1	灰 10Y6/1	靑灰 10Y5/1	靑灰 10Y5/1	肥前
T-3	TP1	陶器	皿		11.9	3.2	4.1		扇縁鉢、 蛇/目縁割ぎ	透明釉、磨胎	オリブ・黄 7.5Y6/3	灰 5Y6/2	灰 2.5Y6/2	灰黄 2.5Y6/2	内野山瀬
T-4	TP1	磁器	皿		13.6	3.2	7.5		染付、 蛇/目縁割ぎ (見)五弁花	蔓草					被左見
T-5	TR1	陶器	碗		12.0	8.3	12.0		京焼皿	緑灰胎	緑灰胎	オリブ 5Y5/4	オリブ 5Y6/6	灰白 5Y7/2	肥前系
T-6	TP2	陶器	皿		14.1	2.6	3.8		灰胎、梅紋	灰胎、 (底)磨胎	浅黄 2.5Y7/4	にぶい黄橙 10YR6/4	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	
T-7	TP2	土製品	土鏝		全長 4.0	全幅 2.7	全厚 2.8	重量 20g	直径12mmの 円孔			浅黄帯 7.5YR8/6	浅黄帯 7.5YR8/6	浅黄帯 7.5YR8/6	
T-8	TR1	陶器	楕鉢	口縁	(27.6)	(5.0)				(口)1条沈線	(口)2条沈線	地灰 7.5YR4/1	黒地 7.5YR3/1	にぶい 2.5YR6/4	
T-9	TR1	磁器	碗	底部	(2.7)				染付						広東形
T-10	TR1	土製 土器	埴炉	口縁	(27.4)	(6.5)			円形通し	ナデ	(口)沈線、 赤色帯帯 7.5YR7/6	黒 5Y2/1	にぶい地 7.5YR7/6	炭素吸着	
T-11	TR1	石製品	砥石		全長 (12.1)	全幅 (1.9)	全厚 1.9	重量 65g	仕上げ砥		砥面は横やかな凹面をなす。				



## 2. 基本層序

調査区内の堆積状況は、試掘調査を通して概ね把握することができた。調査対象地の西端にあるTP1の北壁とTP2の西壁、東端にあるTR1の東西両壁で得られた情報からは、各々の地点で表土層にやや混雑があるものの、表土以下には褐色系の堆積土が存在している。低位には砂堆形成の主役である灰色系砂層があり、今回の調査に関わる深さで確認される砂粒サイズは1mm以下が卓越している。尚、下層の確認に伴い表土下1m50cm(標高6m)辺りで砂粒が粗くなり、標高5m50cmでは径の揃った礫が成す互層が見られた。ここでは、TR1の東壁の特に南半とN区北壁、S区南壁で後世の改変が穏やかな部分が見られるので、これらを手掛かりとして、調査区の堆積状態を説明したい。

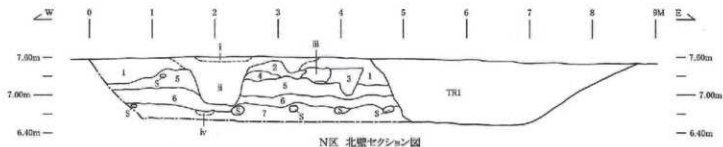
TR1の南半には黒褐色の表土が存在しており、この下層には既に砂質の暗灰色土がある。層厚は約30cmで、砂堆の形成にとって主たる役目を負う砂層を起源とする層と認められる。S区の南壁では表土が灰色土であり、直下には褐色土がある。表土と下位の層は不整合である。この褐色土層以下では明瞭な不整合面は認められない。N区北壁では灰褐色土の表土、その下の層群は砂の影響下に成立している。

表土下の層群に就いてみると、TR1の南半では砂質の暗灰色土と間層である灰色砂層を挟んで灰色砂土がある。S区南壁では間層は確認されていないが、暗灰色土と灰褐色土がある。ここでは、その上位に褐色土が存在している。N区の北壁では灰色土と灰褐色土が砂質の層として確認されている。それぞれ色調に微妙な違いはあるものの、砂質起源の土層群と考えられ、TR1で見られるような間層の存在は他では認められなかった。この層群は時期的に少なくとも二つに分けられるであろう。

それぞれの地点で厚く存在する下層の砂層は、TR1では灰色砂、S区南壁では灰色土、N区北壁でも黄灰色の砂層として確認されている。この砂層と上の二つの砂質土層の大きな違いは締まりのある・なしであって、これは構成粒子が主に砂粒のみかあるいは、砂粒に細かな粒子が混ざったものかの違いで、これを主な要因とした変化かと考えられる。また、上の二つの層が下層の灰色砂層に比べて色調が暗色に変移しているのが認められる。これは土壌化が幾分か進行し、有機質の度合いが増した結果かと思われる。表土化の範囲は堆積層の上部に痕跡として残されている。この周辺では少なくとも二度の砂層堆積が発生し、その間隔は砂堆の環境下で土壌化が発生するような時間であったと言えるだろう。TR1で間層として捉えた砂層は、上位層である暗灰色土と同時に形成された堆積層の一部であり、表土化の及ばなかった部分と考えることもできる。

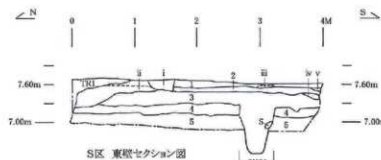
また、図では明示できなかったが、N区北壁では下層の砂層上部に明色の締まりある砂質部分が幅2~3cmであり、部分的に纏まっていて、土師器の破片が出土していた。下部砂層の堆積からあまり時間を置かないでの堆積と捉える事も可能だろう。

さて、現表土(一部には直下の堆積層が含まれる)は、明らかに盛土とか客土と判るものとは異なり、砂堆の形成が一次的に停滞したときに標高の低い所の旧表土上に堆積したものもあるかと思われる。



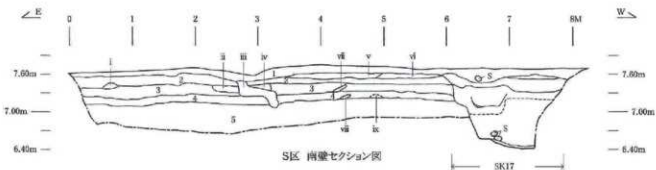
N区 北壁セクション

No.	層名	土色	特徴
1	灰褐色土	黄褐2.5Y5/3	黄～褐色土ブロック含む。
2	灰褐色土	黄灰2.5Y4/1	
3	灰色土	灰5Y6/1	
4	暗灰色土	灰黄2.5Y6/1	砂質
5	灰色土	灰白2.5Y7/1	砂質、結核りややあり。
6	灰褐色土	灰黄2.5Y6/2	砂質、結核りあり。
7	灰白色砂	黄灰2.5Y5/1	砂、5mm大の円礫を含む。
i	黄色土		至砂質、(土盛上)
ii	黄色土		ブロック多量、灰白色土(浮城)、X、円礫混。
iv	灰白色砂	灰白5Y7/1	土脚礫片出土箇所



S区 東壁セクション

No.	層名	土色	特徴
1	暗灰色土	暗灰10YR8/1	
2	褐色土	にぶい-黄橙10YR7/3	
3	暗灰色土	黄黄橙10YR8/4	
		黄灰2.5Y5/1	
4	明褐色土	灰黄2.5Y6/2	
5	灰色土	黄灰2.5Y6/1	砂質(0.5mm以下の砂粒)、結核りなし。
i	明褐色土	灰黄橙10YR4/2	
ii	褐色土	暗灰10YR5/1	棕色土、褐色土混。
iii	灰色土	黄黄橙10YR6/6	
iv	灰褐色土	黄黄橙10YR8/4	
v	灰褐色土	黄黄橙10YR8/4	



S区 南壁セクション

No.	層名	土色	特徴
1	灰色土	暗灰10YR8/1	
2	褐色土	黄橙2.5Y7/4	
3	暗褐色土	黄灰2.5Y5/1	粒性ややあり、結核りあり。
4	灰褐色土	灰黄2.5Y6/2	結核りあり。
5	灰色土	黄灰2.5Y6/1	
i	暗褐色土	にぶい-黄橙10YR7/2	黄色土混。
ii	暗褐色土	暗灰2.5Y5/2	
iii	暗褐色土	灰黄橙10YR4/2	褐色土混。
iv	明褐色土	にぶい-黄橙10YR8/4	
v	暗褐色土	にぶい-黄橙10YR7/1	
vi	暗褐色土	黄黄橙10YR8/4	
vii	明褐色土	黄黄橙10YR8/4	灰褐色土混、生物残片。
viii	褐色土	にぶい-黄7.5YR5/4	灰褐色土混、生物残片。

0 1m

図9. 調査区 断面図 (S=1/60)

### 3. 遺構と遺物

#### SK1とSK2

平面図は図11(P24)、遺物図は図20(P33)、写真PL.2・3・23

調査N区西壁際で検出された井戸痕であり、黄白色土の円形枠を持つ。井戸枠の外径は約90cmを測り、枠自体の厚さは約6cmである。内部は廃棄に伴って砂利(礫で埋め戻されている。土坑枠は江戸時代後期の土坑の枠で見られる黄色粘土又は橙色粘土に比較すると白色が強く、混和剤として含まれる砂粒の粒径も一様である。円筒形の規格品である枠を積み重ねて井戸枠として用いたと考えられる。井戸の掘方は枠の外側約50~60cmの所に見られる。SK1の南には隣接してSK2がある。SK2はコンクリートの枠を持つ。方形の角を面取りしたような不正多角形の平面形態を有する。枠の幅は約6~10cmの造り付けである。枠頭から約1mでコンクリートによる床面が造られている。枠頭から約60cmの深さで、東側に幅30cm程度のテラスがコンクリートにより設けられている。床面には4本のボルトが埋め込まれており、厚い板が備えられていた。コンクリートの床面よりやや高いSK1の枠頭から53~68cmのところに井戸の壁を打ち欠いた不正円形の穴が穿たれていたことから、湯水用のポンプを設置していたものと考えられる。板は緩衝材又は台板で、足の部分をボルト止めしていたものであろう。昭和期末にこの井戸は土地の所有者によって埋め戻されているが、コンクリート枠のポンプ置き場の存在は記憶に無いということであるから、それ以前にこのポンプは役目を終えて、取り外され、設置場所は埋め戻されていたことになる。現在周辺に居住されている方々の記憶に因れば、貸家としてあった建物のうち道路(現県道)に面したやや大きめの建物が、湯屋として使われていた時期があったとされる。今次発見の井戸跡とポンプの痕跡はそれに関わるものとも考えられる。また、後述するSK3からSK6は伊跡に関わるものであり、湯屋の存在と何らかの関わりがあるのだろうか。

SK1からは磁器の坏、ガラス玉(ビー玉)が出土している。SK2には廃棄された瓦の破片が多量に存在した。出土遺物は、鉄製品の包丁刃(1)、軒平瓦(2)、器内面に桜花を型打ち成形した磁器の小杯(3)を図示した。他には、端反りの磁器碗、磁器色絵小皿、コバルト釉の磁器杯、プリント施紋の染付磁器皿、土師質の火鉢、陶器の碗や鉢、湾曲した鉄板、スレート、棒状の砂岩、巻貝、獣骨などがある。

#### SK3とSK4

平面図は図12(P25)、写真PL.4・5

調査N区の北部に存在する。SK3は北西-南東方向に長軸を持つ長楕円形であり、SK4は南北方向に長軸を持っている。規模はSK3が長径150cm、短径1m、深さは14cmを測る。SK4が長径110cm、短径83cm、深さは17cmを測る。SK3の北とSK4の南で重複する。何れも浅い皿状を呈しており、断面形は船底状である。SK4が後出する。若干の時間差はあるものの、ほぼ同一条件下に機能した遺構であろう。北側に存在するSK4の床面や下位の砂層は一部で被熱赤変しており、南隣のSK3は北寄り厚い炭層や焼土と考えられる赤色粘土層がある。SK4に堆積していた炭や焼け土を南側へ掻き出した様な状態である。両土坑を最終的に埋める灰色土は共通する。炭と焼土の堆

積は試掘時、TP1の北東隅で見られた。また、後述するSK6にも焼土や炭の堆積がみられる。

出土遺物は、SK3から磁器の色絵瓶、土師質土器の坏、陶器の鉢、炭小片がある。

#### SK5とSK6

平面図は図12(P25)、写真PL.5・6

調査N区の北東部分に位置する。北側のSK5は平面形隅丸方形ないし槽円形を呈しており、南側のSK6は平面形不整槽円形を呈している。何れも南北方向に軸や長軸を有している。規模はSK5が南北、東西共に80cm、深さは27cmを測る。SK6は南北約1m、東西約60cm、深さは約20cmを測る。断面形はSK5が逆台形であり、SK6が浅い船底状を呈している。SK5は10～20cmの礫や漆喰塊が多く存在し、SK6は主に赤黒い焼土で構成されており、埋土の下位の一部には炭や灰の存在が認められる。

SK5からは漆喰、SK6からは漆喰、巻貝が出土している。

#### SK7-1

平面図は図13(P26)、遺物図は図20(P33)、写真PL.10・23

上述のようにSK7の南西部分で検出された土坑であり、床と思われる部分には橙色土が厚さ5～10cmで存在した。SK7に既に組まれていた礫群の一部はこの土坑が構築される事で排除、または機能上予め石組みの構築が無かったことが考えられる。形態的には円形であり、直径が約110cm程度と考えられるので、南側のハンダ土坑群と連携する可能性がある。SK7の外郭である硬化面を削って土坑を設けたようで、SK7-1に関わる土層を掘削した後には半月形の欄が残されていた。

出土遺物は、断面形台形の砥石(4)や陶器の皿(5)を図示した。他に、磁器の染付、磁器の小碗、磁器の型打ち成形皿、陶器の瓶、陶器の緑釉鉢、陶器の火器、軟質陶器の瓶、陶器の褐釉甕(口縁部は扁平な玉縁状を呈し、外胴部には黒釉が施される。)、土師質の火器などがある。鉄製品では板状のものと釘状のものがある。板状のものには、木質の付着したものやSK2で見られたやや湾曲したものがある。釘状のものは断面角型で木質が大小付着している。

#### SK7

平面図は図13(P26)、遺物図は図20～22・27(P33～35・40)、写真PL.6～9・23～25・32

調査N区の中央部から東壁際にかけて検出された硬化面と石組を伴う土坑である。西側では隣接するSK8-Sに影響を与えている。また、南西部分は同時期乃至は後出するSK7-1によって影響を受けている。SK7の検出時平面形態は不整形であり、規模は南北約4m、東西は東壁まで約2mであった。上面で不規則な出土を示していた円礫は、遺構の掘削を進めるに従って立面を形成するものとしないうちに分けられた。前者は比較的精緻な砂層の中に並べられており、挿鉢状の傾斜面形成している。南西部分は円形土坑SK7-1に影響されて、石組みを欠いている。この欠損部分と東壁によって画された部分はあるものの、上方から見ると本来は円形から多角形を成していたものであろう。後者の礫群はこの斜面を形成した礫が、何らかの影響で崩れ土坑の中央へ向かって落ち込ん

だものと考えられる。最上段が一定の面を成していたかどうか定かではないが、中央の床面に近い部分から炭片が多く出土したことと関わりがあるかもしれない。ただし、傾斜面の礫や砂が熱を受けていたような形跡は認められなかった。中央部分(最深部分)の深さは検出面から約70cmであり、礫群の最上端からだと更に深さを増す事になる。

SK7を特徴付ける硬化面は上述の石組みのやや外側に存在している。調査区の中央部でSK8の土坑群との関わりについては、検出時点で硬化面が連続しており、相対的に新しい土坑と判断した。遺構掘削当初はこの硬化面が遺構SK7の堀方かと考えたが、現段階で積極的にそれを支持する根拠は持たない。硬化面の範囲は平面形不整形であり、北部では不明瞭でやや北側に張り出している。また南西側ではSK7-1の影響下連続的な硬化面の帯は途切れ、円形な土坑SK7-1の壁面と床面を擬似する形の硬化した半月形の棚帯が作り出されていた。この硬化面は褐色を呈しており、水田などの下位によく見られるマンガンの帯状沈着と考えられ、液体を扱う施設跡ではないだろうか。石積み低位は厚い砂層堆積を掘り込んでおり、少なくとも機能当時は半地下式の構造物であったと考えられる。試掘のTR1西壁で黄色土を伴った土坑様の遺構があり、SK7との関わりがあるとすれば煙道や煙出しに相当するののか。埋土に煉瓦が見られることから、廃棄時期は近代に入ってからと言えるだろう。

出土遺物は、磁器の染付碗(23・24・31)、染付瓶(16)、染付蓋皿(25)、皿(30)、染付皿(28)、染付蓋(29)、青磁染付の蕎麦猪口(15)、陶器の皿(26)、刷毛目鉢(13)、灰入れ(14)、脚付灯明皿(27)、土瓶(21・22)、鍋(12)、播鉢(7・8)、土製品の焔炉(32)、軒平瓦(10・11)、軒丸瓦(9)、石製品では、砥石(20)、石錘(6・19)、鉄製品の板釘(17)、包丁(18)を図示した。他に、磁器の染付碗、染付鉢、染付皿(波佐見)、白磁、陶器の碗(灰釉、緑灰釉、緑絵)、鉢(黄釉、玉縁)、皿(鉄釉、鉄軸掛け)、蓋(鉄化粧)、受付灯明皿、急須、銚子、瓶(緑釉垂れ、鉛釉、白濁釉、鉄絵)、鍋、壺(緑灰釉)、甕(鉄釉)、播鉢、土師質の小皿、火鉢、火器、漆喰、瓦、釘状鉄製品(角、丸)、板状鉄製品、小型ヘラ状鉄製品、鉄製蓋、炭小片、砥石、石錘、ガラス、タイル、魚骨などがある。

31(能茶山産)はSK20からも破片が出土しており、二つの遺構は時期的に重なりをもって機能したものであろう。

#### SK8-1

平面図は図14(P27)、遺物図は図22(P35)、写真PL.11・25・26・32

調査N区の中央部で検出された土坑であり、後述するSK8 NおよびSK8 Sの上面に存在した。主軸方向は南北方向であり、平面形は長方形である。規模は南北120cm、東西60cm、検出面からの深さは約20cmを測る。断面形は概ね逆台形を呈している。

出土遺物は、磁器染付の広東形碗(36)、磁器染付の碗底部(37・38)、端反りの磁器小碗(39)、陶器の播鉢(34)、陶器の壺底部(35)、土師質の焔炉(33)、砥石(40)と土製品(D-1・D-5)、銅銭(M-1)を図示した。他に、磁器の染付皿(蛇ノ目軸刺ぎ)、陶器の碗(鉄釉)、鉢(緑釉、鉄釉、白釉)、播鉢、壺(鉄釉垂れ)、須恵器の甕(タタキ)、土師質土器の小皿、火器、貝殻(牡蠣)、ガラ

ス、鉄製品の釘や板、獣骨、漆喰、コンクリート片、炭片などがある。

#### SK8-NとSK8-S

平面図は図14 (P27)、遺物図は図22～24・27 (P35～37・40)、写真PL.10～12・26～27・32

SK8-Nは調査N区の中央部に検出された遺構である。検出面では東側に位置する石組み遺構SK7と同様な規模の大きな遺構と考えていたが、掘削を進めていくに従い南北に存在する二つの円形土坑であることが判明した。SK8-Nの規模は直径165cm、検出面からの深さは遺構の中央で約70cmを測る。西側から北にかけて土坑の壁は急に立ち上がる。東側はSK7の影響によるものか、安定した壁面は残されていない。SK8-Nと南隣のSK8-S、二つの遺構の規模や平面形態の近似など共通する所が多く見受けられる。その一つに底部に粘土を敷き詰める施工がある。緩やかに窪んだ底面全体に厚さ約5cmの粘土を敷く。調査区内を含むこの周辺は砂堆であるから、下層には厚い砂層の堆積がある。床面の構築はこの砂層まで及んでいて、砂層を掘り込んだのちに暗褐色の粘土を用いて丁寧に作り上げられている。一様な安定した床面を得る為、または下層からの湿気などを防ぐ効果もあったのか。掘削時期、埋積過程からは新旧を見極め難く、二つの土坑は同じ時期に、同じような目的を持って掘られた土坑と考えてよいであろう。底面に粘土を敷き詰める施工は調査S区のSK10でも見ることができる。

遺物は、SK8-Nから銅銭2枚(M-2・M-3)が異なった場所から出土している。M-3は粘土直上からの出土であった。

SK8-Sは調査N区の中央南寄りで検出した土坑である。平面形はSK8-Nよりやや小さい円形である。規模は直径約150cm、検出面からの深さは約60cmを測る。床面は緩く窪んだ曲面を成し、SK8-Nと同じく底部に厚く粘土を敷いていた。西側から南にかけて土坑の壁は急である。床面の粘土上には黄色土や炭化物片を多く含んだ埋土が観察できる。また、20cm大と40cm大の河原石とかわらけ(42)が置かれた状態で見ついている(P27図参照)。SK8-NとSK8-Sは性格を同じくする土坑群と考えてよいだろう。比較的早い段階周辺に出現した遺構と考えられ、目的は埋葬等の祭祀的なものと考えられるだろう。

出土遺物は、磁器の杯(43)、磁器の染付蓋皿(44・45)、磁器染付の広東形碗(49)、磁器染付の煎茶碗(50)、磁器の染付碗(60)、紅皿(52・53)、磁器染付の口鏝小皿(54)、陶胎染付の碗(61)、陶器の碗(41)、陶器の呉器形碗(51)、陶器の灰釉碗(66)、陶器の盞手煎茶碗(65)、陶器の小鉢(58)、陶器の鉢(56)、陶器の蓋(46)、陶器の灰落し(59)、陶器の羽釜(62)、陶器の挿鉢(67)、土師質土器の小皿(42)、土師質土器の灯明皿(55)、土師質土器の坏(63)、土師質土器の焙烙(57)、丸瓦(48)、磁石(47)、石鏝(64)、叩石(69)、鉄製品の板釘(68)と銅銭2枚(M-2・M-3)を図示した。他には、磁器の染付杯、染付碗、染付瓶、染付皿、陶器の小碗(灰釉)、碗(鉄釉、灰釉)、皿(内野山窯)、鉢(鉄釉、灰釉)、鍋(灰釉)、瓶(鉄釉、灰釉)、挿鉢、壺(鉄釉)、甕(鉄釉、鉄釉掛け)、土師質土器の小皿、焙烙、火器、平瓦、碁石、鉄製品の釘、盤、板、L字状鉄製品、鉄片、鉄塊、鉄滓、二枚貝、炭片や土師器の甕などがある。このうち41はSK8-Nの下層、M-3は粘土上から、また42はSK8-Sの床面上から出土した。円礫を用いた石鏝(64)や叩石(69)は、概



ね他の出土遺物と出自を同じくするものと考えられる。特に前者に至っては現代でも河原石を打ち欠いて使用されることがあると聞く。68は鉄製の平らな釘で木質の付着が認められる。SK7でも同様な釘が多く出土しており、限られた幅狭の板材部位を繋ぐものと考えられる。

## SK9

平面図は図15(P28)、遺物図は図24(P37)、写真PL.12・13・28

調査N区の南端にある。調査区の南壁によって遺構全体の約2/3を調査した。所謂「ハンダ土坑」と呼ばれるものの範疇としてよいであろう。底の部分、円盤状の台、周囲には壁の名残が残されており、壁の存在は南側のセクションでも確認される。ただし、この南壁セクションで確認される土坑壁の立ち上がりは数10cmであり、近世末の周辺集落遺跡で見られる土坑枠の壁の高さと比べると低く、上部が既に破壊された為か、元来低い壁で使われたものか、はたまた内部構造はどのようなものであったのか、ここでは知ることが出来なかった。因みに東隣のSK18の壁の立ち上がりも数10cmであった。甕や桶などの容器底部を安定させる目的で造られ、容器の大部分は土中に埋められて用いられるものであろうか。

SK9は平面形円形で規模は直径70cm、土坑壁の立ち上がりは20cmで、厚さは約6cm、底部の厚さは7~8cmを測る。集落遺跡の枠を持つ土坑群と比較すると小型で堅牢な造りの印象が強い。底部の中央は使用の為であろうか、面が剥がれて窪んだ状態であった。

出土遺物は、磁器の染付皿(70)が床面上から出土しており、これを図示した。他には、磁器の染付小碗などがある。

## SK18

平面図は図15(P28)、遺物図は図25(P38)、写真PL.12・13・29

調査N区の南端でSK9と並んでいる。遺構全体の約1/2を調査した。土坑枠の残りは良好で、円盤状の底部と南壁セクションには壁状の立ち上がりが見られる。平面形は円形で、規模は直径75cm、壁の立ち上がりは15cmで、幅は8cm、底面の厚さは6cmを測る。SK9とSK18は規模や配置から、使用目的を同一とするものであろう。後述するSK11、SK11-1、SK12、SK13、SK14、SK15と規模が共通するので、同時に同じような目的で設置された可能性がある。

出土遺物は、磁器染付の広東形碗(83)、陶器の鉄釉瓶(84)を図示した。他には、陶器の瓶、鉢(刷毛目)、裏込め部分から磁器の瓶などがある。

## SK19

平面図は図15(P28)、遺物図は図25(P38)、写真PL.13・29

調査N区の南端にある。全体の1/3程度を調査した。平面形が半円形で検出され、中央部分では径がおよそ70cmで、円形または楕円形を呈するであろう。外周に沿って幅10cmで橙色粘土が存在した。SK19は南壁セクションで見ると、長さ140cm程度の規模を持つ土坑で、底面に暗灰色土を10cmの厚さで敷設し、床面を平らに仕上げたものであろう。両端は10cm程立ち上っている。黄色土の



土坑枠を持つSK9やSK18と趣を異にしており、西隣のSK18に先行していた可能性がある。SK19の土坑壁を一部破壊する形でSK18は掘削された様だ。SK19の最終埋土は灰褐色土で黄色土ブロックや瓦片、炭片を含んでいる。

出土遺物は、裏込め部分から磁器の杯(85)を図示した。

#### SK20

平面図は図15(P28)、遺物図は図25・26(P38・39)、写真PL.20・29・30

調査N区の南部西端にある。平面形は長軸方向を東西とする不整形方形または楕円形である。南辺でSK9がSK20を掘削して設置される。また、SK20の北東部分では恐らくSK8-Sが小さな影響を受けたと勘解得られる。東壁に遮られてSK20の全体は見られていないが、東西方向を長軸とする隅丸長方形または楕円形である。東側にやや浅いテラス状の断部がある。規模は東西方向に既存値160cmで南北方向は最大値140cm、検出面からの深さは60cmを測る。SK20の特徴は、他の土坑に比べて出土遺物が多く、陶磁器類、瓦類の破片には大きなものが多く見受けられる。また、土坑の北半に出土傾向が偏っているのも特徴的である。埋土は砂質の暗灰褐色土であり、砂層に接して褐色の帯状滲沈を作りだしている。廃棄の性格を持つ土坑であろうが、本来の掘削は排水等の目的があったのかもしれない。

出土遺物は、磁器の染付蓋皿(86)、磁器の染付碗(87・88・99)、磁器の染付中皿(102)、陶器の灰釉碗(89)、陶器の煎茶碗(100)、陶器の灰釉皿(101)、陶器の鉄釉瓶(91)、陶器の灰釉鍋(103・104)、陶器の灰釉鍋底部(90)、陶器の鍋(98)、陶器の摺鉢(92)、瓦質の火鉢(93・94・95)、瓦質の灰入れ(96)、土師質の焜炉(97)を図示した。他には、磁器の染付碗、染付灰落し、鉢(緑釉)、陶器の皿(鉄釉)、鉢(鉄釉、灰釉、刷毛掛け)、鉢子(緑釉)、瓶(白灰釉)、鍋(飛砲、灰釉)、甕(褐釉、鉄釉)、土師質土器の小皿、焙烙などがある。

遺物の多くは近世末から明治時代初頭の遺跡に見られる土器群であり、機能時期は江戸時代の範疇にある。先述のとおりSK7との遺構間接合資料があり、中心的な石組み遺構に付随した施設と考えられる。出土遺物が他の同規模土坑と比較して多くあり、まとめた廃棄を考慮するべきか。

#### SK10

平面図は図16(P29)、遺物図は図24(P37)、写真PL.14・15・28

調査S区の南西部にある。黄色～橙色土の土坑枠を持つ。長岡台地上の近世遺跡の調査で屋敷に伴う土坑には円形の枠を持った土坑が多く見られた。また、数は少ないが方形、長方形の土坑が存在しており、相対的に規模の大きなものが多く見られる。SK10では、枠構築前の丁寧さに特筆すべきところが見られる。ここでは先述したSK8-N、SK8-Sの底で見られたと同様、砂層まで掘り下げた底部に黄灰色の粘土を厚く敷き安定を図り、土坑枠の裏込めにも円礫や瓦片とこの粘土を絡めて用い構築している。比較的大きなサイズの円礫や瓦片を低位に隙間を詰めて配し、手頃な大きさの円礫は瓦片と共に面を作るよう指向して積み重ねているようだ。

SK10の土坑枠は平面形長方形であり、規模は南北160cm、東西140cm、検出面からの深さは約25

cmを測る。黄色土の枠は幅4～5cmであり、裏込め部分は幅約30～40cmに及んでいる。底部に安定を図って敷き詰められた粘土の厚さは約10cmである。調査区西壁でSK10に関わる裏込めの高さは標高7.20m程度まで及んでいるので本来はこの程度の高さまで枠が全周していた可能性がある。SK10の埋土には枠に使われていたと思われる橙色土がブロックで含まれているので、SK10は機能終了後埋められた段階で土坑上半分の多くを失った事になる。枠は北東隅で残りが悪い。床面も壁も不明瞭であった。この部分から内側に溜まった液体を汲み出した等の影響だろうか。(注1)

後述するがSK11はSK10が廃棄、埋められた後に造られている。SK11は関連する土坑群SK11-1やSK12などと共に土坑底を標高6.95mとし、SK12の埋土内に華大の円礫を円く並べて構築している。

出土遺物は、磁器の型押し成形の蓋(71)、磁器染付の丸形碗(72)、磁器の染付皿(73)、陶器の播鉢(74)、軒平瓦(75・76)、石鍾(77)を図示した。

他には、磁器の瓶、土師質の火器、平瓦、巻貝、二枚貝と裏込め部分から陶器の灰釉皿などがある。

(注1) SK10の性格については、植田秀夫(香南市夜須町)、松村信博(香南市文化財センター)両氏から近世住居に見られる厩(しず)ではないかと指摘があった。井戸や水路の存在は明らかではないのでここでは言及できないが、やや大きめの枠構造を持った土坑にも家屋に付随する洗浄、浄化施設が存在するようだ。

岸本地区の町屋には東西方向の道路を挟んで両側に家が並んでいる。屋地は基本的に南北に長い矩冊形を呈している。商家は比較的大い間口と玄関部分の上間を持っている。一般の家屋では玄関から細い通路が奥へ向けて延びていて、片側に居間などを配した居住スペースがある。反対側には狭い座敷や物置があり、その奥に向かって浴室、便所が並んでいる。屋地の奥には蔵や倉庫があり、主屋とそれらの間に庭や菜園が作られている。

## SK11

平面図は図16(P29)、遺物図は図24(P37)、写真PL.19・28

調査区南西部、SK10の範囲内、上述のように埋土内で検出された。黄色～橙色粘土の残存よりも環状に残された円礫が異様に映った。円礫群の内側には黄色土が残されていたので、本来枠構造を持つ土坑であろう。北側に並んだSK11-1、SK12、SK13、SK14などと共通する土坑群の一つと考えられる。北隣のSK11-1も土坑壁の存在は推定の域を出ないが、SK12とSK13で外周部分に壁の立ち上がりと考えられる部分があり、これから推して調査区南の南端から調査区西部に存在する小型の土坑群は同じ形態のものと考えてよいだろう。(注2)

環状に置かれた円礫は10～20cm大のものであり、円礫の内側で径が50～60cm、外側では径が約80cmを測る。先述のSK9と規模は近い。

出土遺物は、陶器の播鉢(79)、陶器の瓶(80)、土師質の焙烙(78)を図示した。他には、磁器の染付碗、瓶、陶器の瓶、巻貝、二枚貝、鳥骨などがある。

(注2) 小型の土坑群、これに伴ってはいないが、大型の壺口縁部が幾らか出土している。藍を用いた染色などには、埋め瓶として大型の甕を使用する。近代に山北、山南、徳王子では藍葉の栽培が盛んであり、岸本では染色が行われていたとされている。小型の土坑はその跡ではないだろうか。

SK11-1

平面図は図16(P29)、写真PL.19

調査S区の西部にある。SK10の埋土と裏込めの上に築かれた土坑である。先述のようにSK11と同じく黄色土の枠を持つものと考えられるが、検出したのは底部の南半のみである。推定される規模と形態は、直径約60cmの円形と考えられる。

SK12

平面図は図17(P30)、写真PL.19

調査S区の西部にあり、南北方向に並んだSK11～SK14の土坑群の中程に存在する。平面形は円形を呈しており、規模は直径約80cmである。黄色土の枠を持つ土坑であり、壁は幅約6cmで基部のみを残し、底部は厚さ2～4cmを測る。底部下には暗灰褐色土を入れて床の安定を図ったものと考えられる。

出土遺物は、陶器の鉢(鉄釉)、瓶(鉄釉)、瓦、二枚貝である。

SK13

平面図は図17(P30)、写真PL.19

調査S区の北西部にある。平面形を呈しており、規模は直径約75cmを測る。外周に壁の痕跡が残されており、幅は6～8cmである。床部分には5～8cmの厚さで黄色土が残されている。また、底には6cmの厚さで暗褐色土があり、ここでは砂層上の土坑の安定を図っている。

SK14

平面図は図17(P30)

調査S区の北西部にある。土坑枠の一部であろう黄色土を検出し、その下位にはSK12やSK13で存在した暗灰褐色土が見受けられる。SK11から南北に並ぶ一連の黄色土の土坑枠を持つものである。同じ並びで調査N区の南端にSK9があるので、SK14の北側にもうひとつ土坑が存在する可能性がある。SK14の形態や規模は、飽くまでも推定の域を出ない。平面形は円形と考えられ、径約70cmの範囲と考えられる。ここでも下位に暗灰褐色土が一部に見られた。

SK15

平面図は図17(P30)、写真PL.19・20

調査S区の北西部中央寄りにある。SK14と同じく、やや小型の枠構造を有する土坑群の一つであり、黄色土と暗灰褐色土が一部残っている。円形と考えられる土坑床部分の約1/2を検出した。平面形は円形と考えられ、推定規模は直径約60cmである。

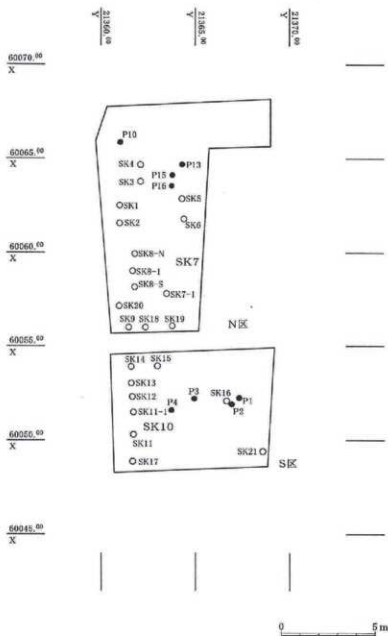
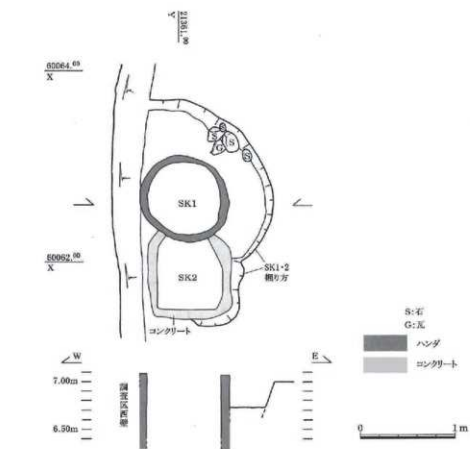
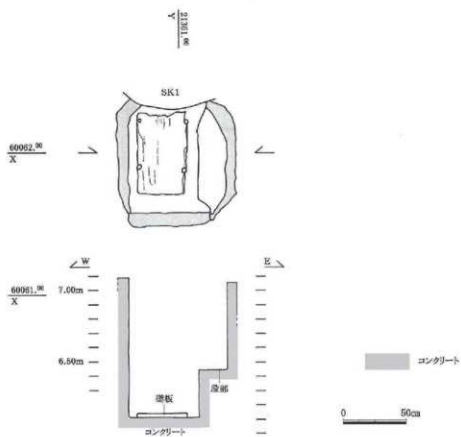


図10. 遺構配置図 (S=1/200)



SK1・2 平面・エレベーション図



SK2 平面・エレベーション図

図11. 遺構図SK1・2 (S=1/40, 1/30)

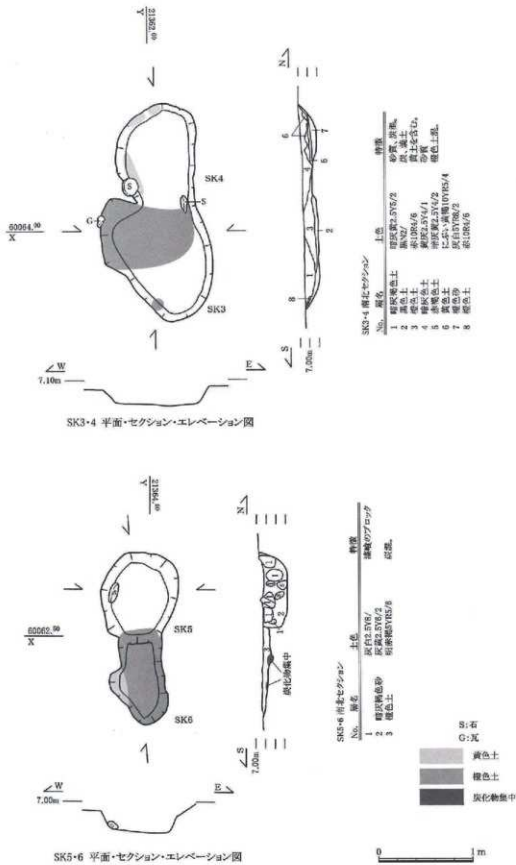


図12. 遺構図SK3・4・5・6 (S=1/40)

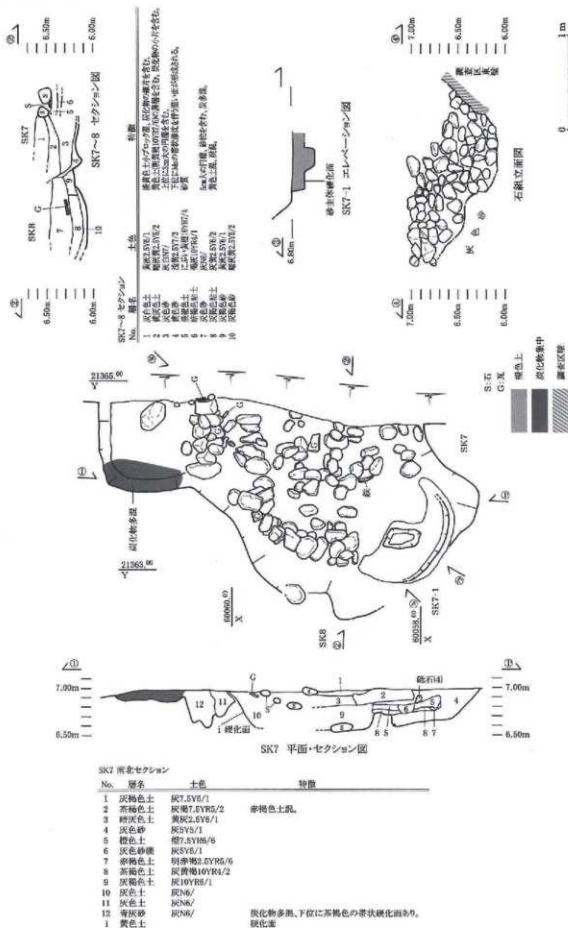


図13. 遺構図SK7他 (S-L/40)



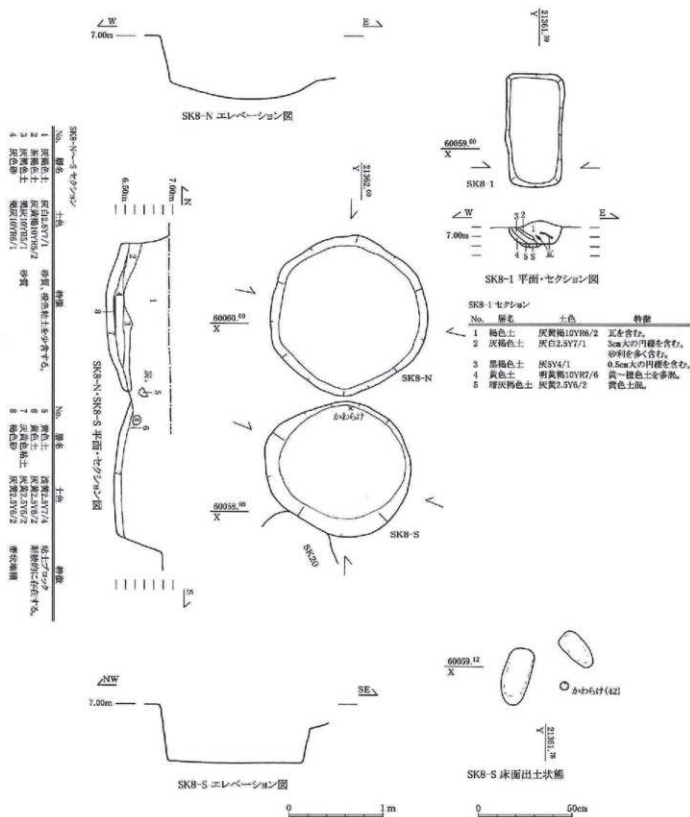


図14. 遺構図SK 8 他 (S=1/40, 1/20)

第4章 調査の成果

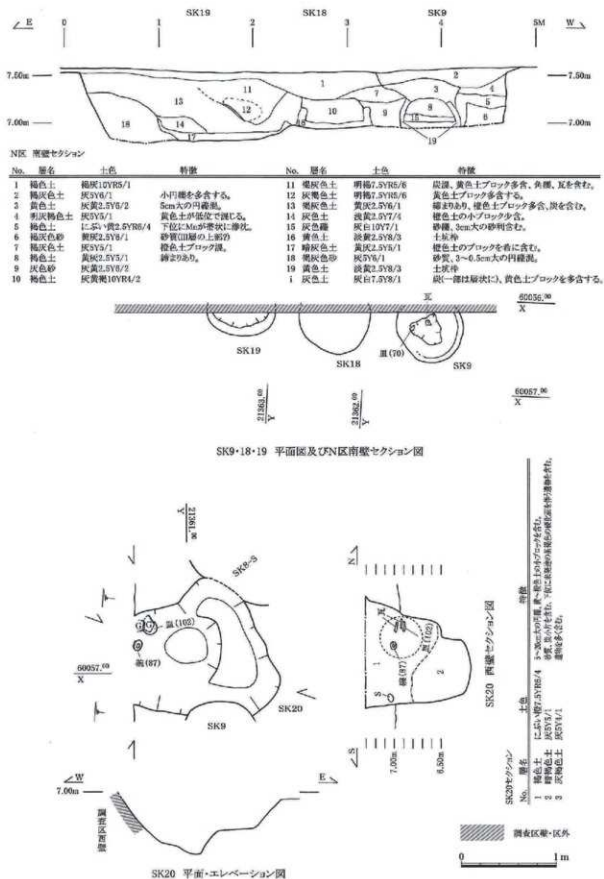


図15. 遺構図SK9・18・19・20 (S=1/40)

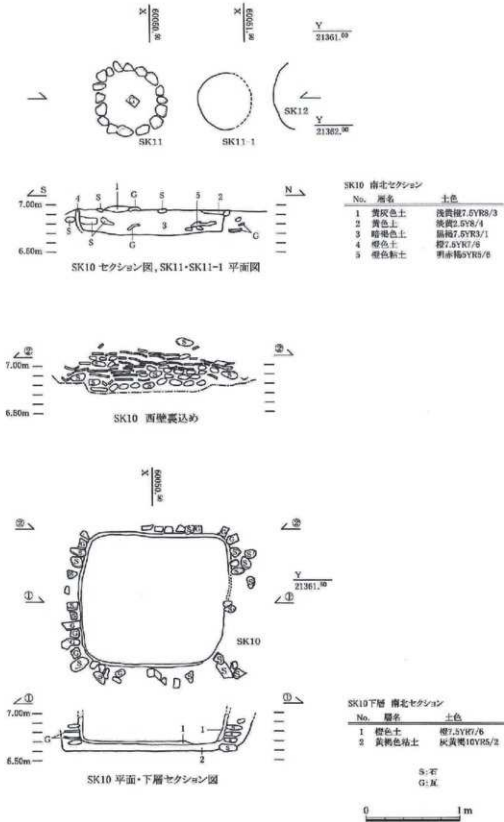


図16. 遺構図SK10・11他 (S=1/40)

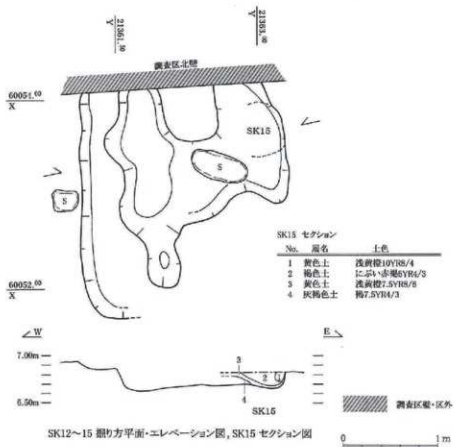
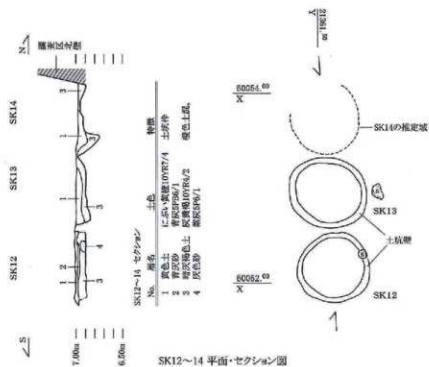
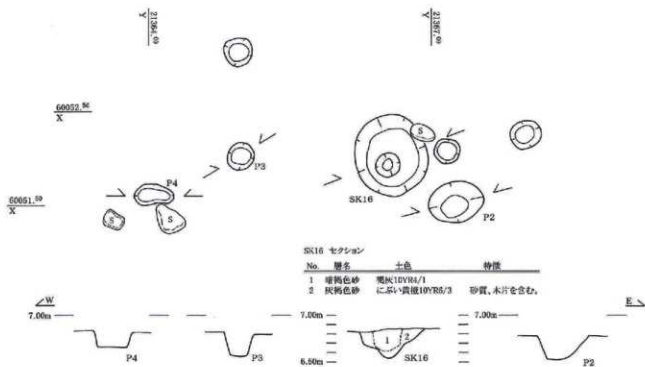
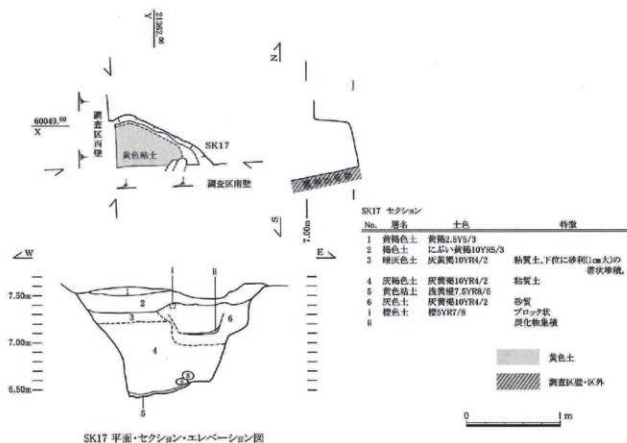


図17. 遺構図SK12・13・14・15 (S=1/40)

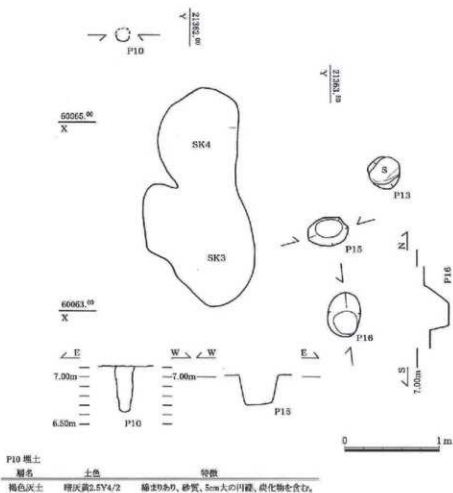


SK16と周辺の遺構平面・セクション・エレベーション図



SK17 平面・セクション・エレベーション図

図18. 遺構図SK16・17 (S=1/40)



P10・13・15・16 平面・セクション・エレベーション図

図19. 遺構図P10他 (S=1/40)

### SK16

平面図は図18(P31)、遺物図は図27(P40)、写真PL.20・32

調査S区の中央部東寄りにある。遺構検出は砂層(調査S区東壁及び南壁のV層)で行った。明褐色土(調査S区東壁及び南壁のIII層)を包含する遺構群(主に柱穴サイズ)が検出された。時期や性格を明確にできるものを持たないが、SK16とした小型の土坑では周辺を含めて遺物が発見されている。SK16の埋土は初期に灰褐色砂で、土坑の中央床部分に木片が含まれていた。次に炭化物等による影響で暗灰色～黒灰色を呈した砂層が中央部を埋めている。

出土遺物は、土製品のおかめ(D-2)、土製品の猿(D-6)、土製品の貝(D-7)を拓影で示す。他には、炭片などがある。

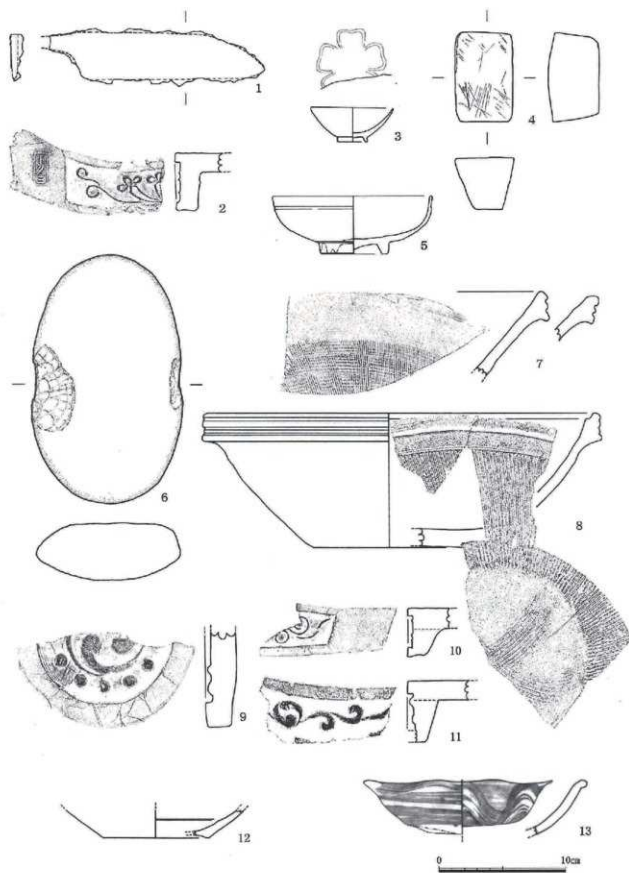


图20. 遺物図 1~13 (S=1/3)



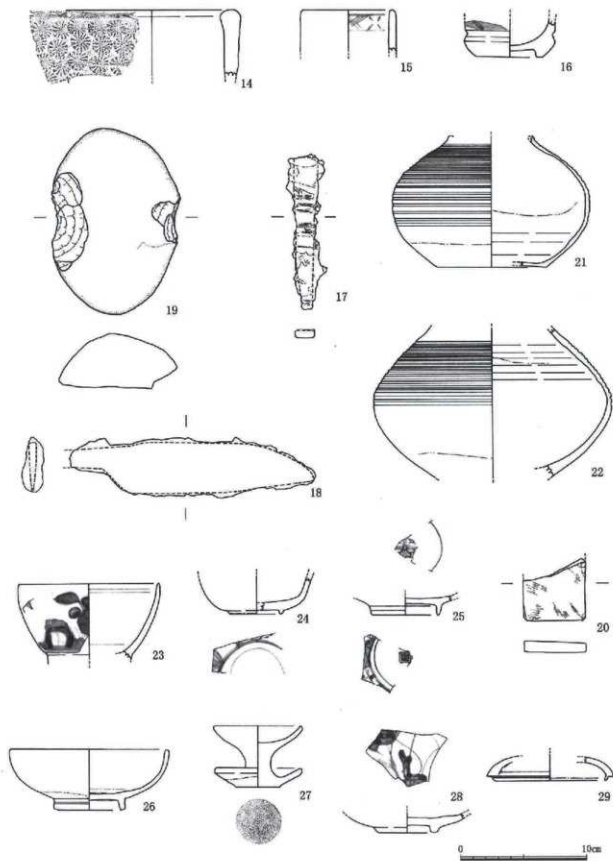


图21. 遺物图 14~29 (S=1/3)

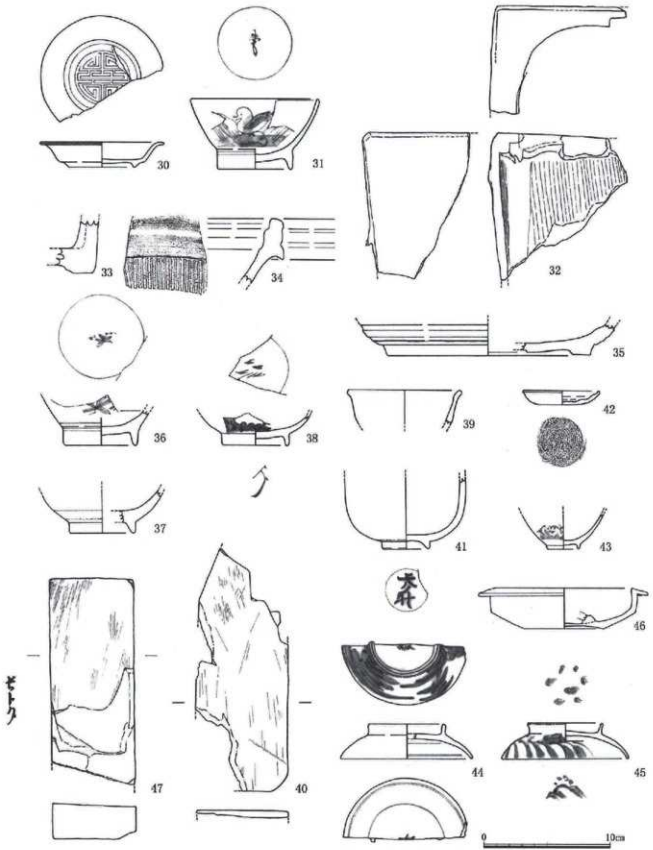


図22. 遺物図 30~47 (S=1/3)

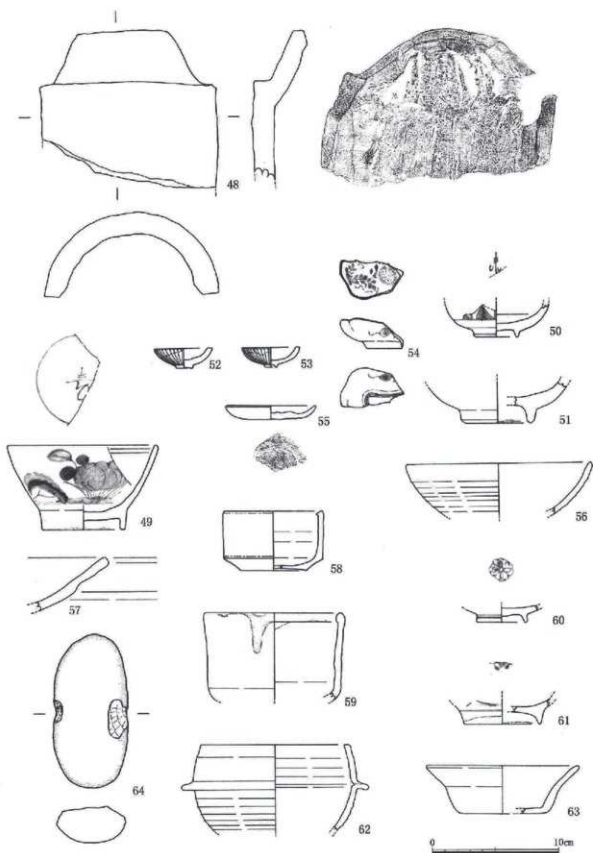


図23. 遺物図 48-64 (S-1/3)

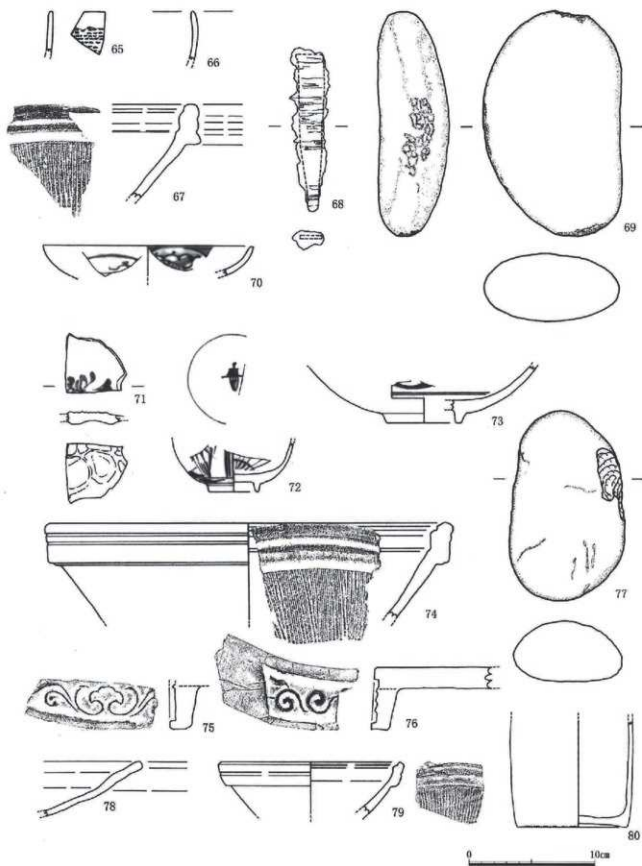


図24. 遺物図 65~80 (S=1/3)

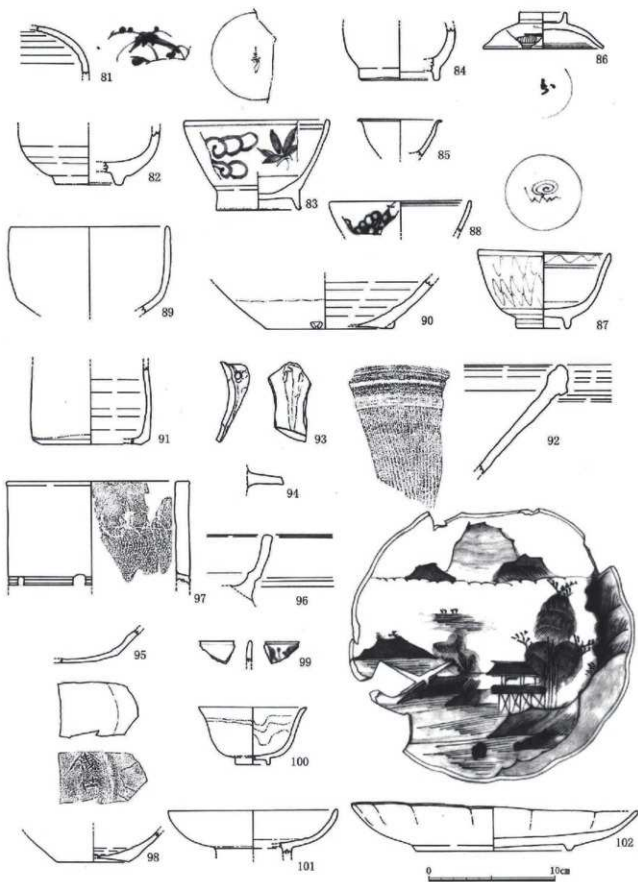


図25. 遺物図 81~102 (S=1/3)

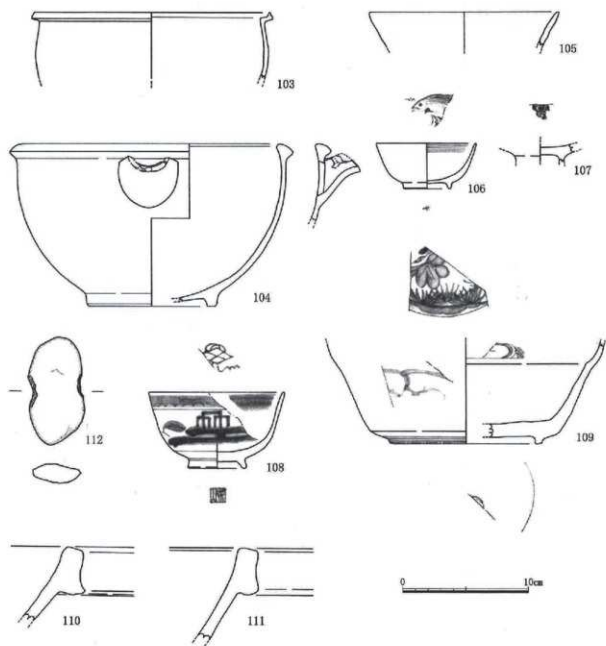


图26. 遺物図 103~112 (S=1/3)

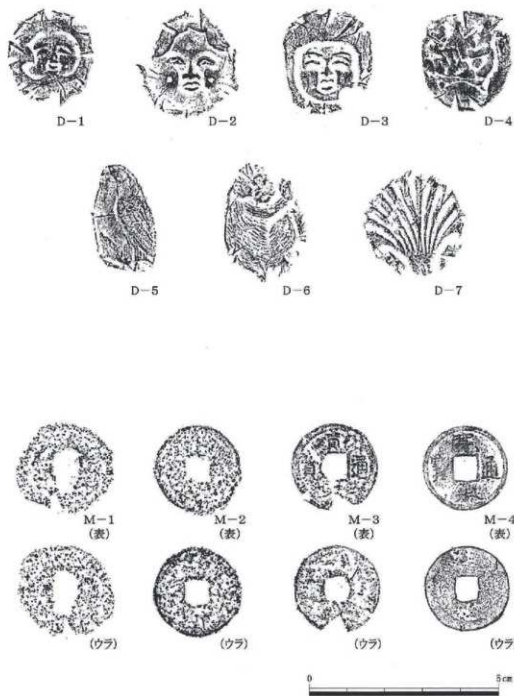


図27. 遺物図 D-1～D-7、M-1～M-4 (S=1/1)



表2. 遺物観察表 2

調査区 No.	出土遺物 器種	器形	部位	法量 (cm)				特徴	形態・文様		色調		備考	
				口径	法器高	胴径	底径		内面	外面	内面	外面		断面
1	NEK/ SK2	鉄製品	包丁	全長 (17.0)	全幅 3.6	全厚 (0.5)	重量 98.7g							
2	NEK/ SK2	土製品	瓦 軒平瓦	全長 (8.0)	全幅 (13.0)	全厚 (6.5)		瓦頭に均等唐草文、刻印“トクニ”			灰 N4/	灰 N6/		
3	NEK/ SK2	磁器	杯	6.5	3.8		2.2	型打ち成形	桜花紋(花弁の外が紅色を帯びる。)					
4	NEK/ SK7-1	石製品	砥石	全長 7.1	全幅 4.5	全厚 4.1	重量 203g							
5	NEK/ SK7-1	陶器	皿	12.4	4.6		5.1	砂岩製、楕円形の河原石の中央部を打ち欠く。	鉄輪、蛇ノ目、鉄輪、輪割ぎ	鉄輪、高台露胎	黒褐 5YR3/1	黒褐 5YR3/1	にぶい、橙 5YR6/4	19世紀
6	NEK/ SK7	石製品	石鐘	全長 19.8	全幅 11.9	全厚 4.5	重量 1829g							
7	NEK/ SK7	陶器	排鉢 口縁	(30.1)	(6.7)			釉垂れ	露胎	褐色	洗黄 2.5Y7/3	暗褐 7.5YR3/3	灰黄 2.5Y7/2	
8	NEK/ SK7	陶器	排鉢	(30.6)	10.6		14.1	掘り目は10条1単位。			赤灰 2.5YR5/1	暗赤 2.5YR5/1	灰赤 2.5YR5/2	
9	NEK/ SK7	土製品	軒丸瓦	全長 (2.0)	全幅 (13.5)	全厚 (7.5)		瓦頭に三ツ巴紋を配す。			暗灰 10Y5/1	灰白 2.5Y7/1		
10	NEK/ SK7	土製品	瓦 軒平瓦	全長 (3.5)	全幅 (11.5)	全厚 (4.5)		瓦頭に蔓草。			暗灰 N3/	灰黄 2.5Y7/2		
11	NEK/ SK7	土製品	瓦 軒平瓦	全長 (6.5)	全幅 (11.0)	全厚 4.8		瓦頭に巴紋と唐草を配す。			灰 5Y6/1	灰黄 2.5Y6/2		
12	NEK/ SK7	陶器	鉢 底部	(2.2)			(8.3)	碁高底	煤付着		洗黄橙 7.5YR5/6	灰褐 7.5YR5/2	洗黄橙 7.5YR5/6	
13	NEK/ SK7	陶器	鉢 口縁	(23.6)	(4.3)			白土刷毛掛け(縦状)	刷毛掛け(横位)	洗黄 7.5YR5/3	にぶい、橙 2.5Y7/4	洗黄 2.5Y7/4	にぶい、黄橙 10YR5/3	
14	NEK/ SK7	陶器	火鉢 口縁	13.2	(5.2)			ナデ	ミヅキ、縦紋を施す。	橙 2.5YR5/6	橙 2.5YR5/6	にぶい、橙 5YR7/4		
15	NEK/ SK7	磁器	蕎麦猪口	口径 (7.0)	(3.2)			青磁染付	青磁輪		灰 N6/	灰白 10Y7/2	広瀬 岡山	
16	NEK/ SK7	磁器	飯 底部	(2.1)			5.3	染付	露胎、ナデ	(黄) 輪割ぎ、砂粒付			肥前	
17	NEK/ SK7	鉄製品	板釘	全長 12.2	全幅 3.3	全厚 2.0	重量 42g	木質が付着する。						
18	NEK/ SK7	鉄製品	包丁	全長 (19.3)	全幅 (3.0)	全厚 0.5	重量 147g							
19	NEK/ SK7	石製品	石鐘	全長 14.7	全幅 10.1	全厚 4.4	重量 849g						泥質 片岩 粘板 岩製	
20	NEK/ SK7	石製品	砥石	全長 (4.9)	全幅 4.9	全厚 1.0	重量 36g	裏面には荒い擦痕が残る。						
21	NEK/ SK7	陶器	土瓶	(10.3)	15.6		8.7	(外底) 煤付着	露胎・ナデ・梅輪・ロクロ	沈緑帯・灰輪/露胎	灰白 5Y7/1	灰オリブ 5Y6/2	灰白 2.5Y7/1	
22	NEK/ SK7	陶器	土瓶 胴部	(12.9)	18.8			(外底) 煤付着	露胎・ナデ・梅輪・ロクロ	沈緑帯・灰輪/露胎	灰黄褐 10YR4/2	オリブ灰 5Y6/6	地灰 10YR5/1	
23	NEK/ SK7	磁器	前 口縁	11.2	(6.2)			染付	二重圓縁	草花文				
24	NEK/ SK7	磁器	前 底部	(3.0)			3.6	染付		山、木、鳥を描く。			煎茶碗?	
25	NEK/ SK7	磁器	皿 (蓋皿)	(6.1)			(5.2)	染付	(見) 花卉	草花文、(高) 角内“有”				

表3. 遺物観察表 3

調査区 瓦出土遺物	器種	器形	部位	法量 (cm)				特徴	形態・文様		色調			備考		
				口径	器高	胴径	底径		内面	外面	内面	外面	断面			
26	NK/ SK7	陶器	皿	12.3	4.8		5.0		鉄軸、(見)蛇 ノ目軸刺ぎ	鉄軸、露胎	赤黒	黒	にぶい 橙	にぶい 橙	2.5YR6/4	
27	NK/ SK7	陶器	灯明 具	6.8	4.8	6.9	3.5	台付灯明重	鉄軸	露胎、 糸切り痕	暗褐	灰黄褐	暗灰黄	暗灰黄	2.5YR2/1 10YR3/3 10YR5/2	
28	NK/ SK7	磁器	皿	底部	(1.6)		4.6	染付	草花文	(裏)軸刺ぎ、 砂が接着する。					肥前	
29	NK/ SK7	磁器	蓋	8.6	(1.9)	10.0		染付								
30	NK/ SK7	磁器	小皿	9.7	2.0		5.1	白磁、腰折形、 端反り	(底)陰刻		灰白 N8/	灰白 N8/	灰白 N8/			
31	NK/ SK7- SK20	磁器	広東 形碗	9.9	5.6		5.6	染付	(見)寿文	鳥、(高)「中」					熊本山	
32	NK/ SK7	土師質 土器	焼炉	全長 (8.6)	全幅 (10.3)	全高 (11.7)		上部を円形に 穿つ、内部構 造を欠く。	粗い単位の 刷毛		浅黄 2.5Y7/3	黒 N2/	にぶい 橙	にぶい 橙	7.5YR6/3	
33	NK/ SK8-1	土師質 土器	焼炉	底部	全長 (4.1)	全幅 (5.0)	全厚 (3.5)			棒付着	灰 5Y5/1	灰 5Y4/1	にぶい 橙	にぶい 橙	7.5YR7/4	
34	NK/ SK8-1	陶器	撰鉢	口縁	(5.1)				(口)1条沈線	(口)2条沈線	暗赤褐 5YR3/2	灰褐 5YR5/2	褐灰 5Y5/1	褐灰 5Y5/1		
35	NK/ SK8-1	陶器	蓋	底部	(3.6)		16.0	蛇ノ目高台	口ノ目、露胎	灰軸(緑灰色)、 沈線	にぶい 黄緑	灰白 10Y7/2	灰白 5Y7/1	灰白 5Y7/1		
36	NK/ SK8-1	磁器	広東 形碗	底部	3.7		5.4	染付	(見)草花文	草花文						
37	NK/ SK8-1	磁器	碗	底部	(3.4)		4.9	染付	(高)露胎 (壁)砂接着		にぶい 黄緑	灰白 10YR7/4	灰白 5Y7/1	灰白 5Y7/1	波佐見	
38	NK/ SK8-1	磁器	碗	底部	(2.3)		5.0		(見)器内 飛鳥	草花文?						
39	NK/ SK8-1	磁器	碗	口縁	8.7	(2.8)		白磁、端反り							煎茶碗	
40	NK/ SK8-1	石製品	磁石	全長 (19.2)	全幅 7.2	全厚 (7.5)	重量 113g	仕上げ砥							精板岩	
41	NK/ SK8-N	陶器	碗	底部	(5.7)		3.5		鉄絵		灰白 10Y8/2	浅黄 2.5Y7/3	浅黄 10YR8/4	浅黄 10YR8/4	高台内 に墨字	
42	NK/ SK8-S	土師質 土器	小皿	5.9	1.2		3.8		(底)回転糸切 り痕		黒 7.5YR7/6	橙 5YR6/6	橙 5YR7/8	橙 5YR7/8		
43	NK/ SK8	磁器	坪	底部	(2.8)		2.4	染付	草花文							
44	NK/ SK8	磁器	蓋皿	10.2	2.8		6.0	染付	風景(松、家)							
45	NK/ SK8	磁器	蓋皿	9.8	2.8		5.8	染付	山、鳥							
46	NK/ SK8	陶器	蓋	10.7	3.2		6.2		露胎	緑灰軸	暗灰黄 2.5Y5/2	灰 7.5Y6/1	灰 7.5Y6/1	灰 7.5Y6/1	アーチ 状の柄 み	
47	NK/ SK8	石製品	磁石	全長 (16.3)	全幅 6.5	全厚 2.8	重量 522g	泥岩製、断面 は2面。側面に 墨字で“長トク” または“前トク”?								
48	NK/ SK8	土製品	瓦	丸瓦	全長 (12.4)	全幅 (14.1)	全厚 6.8				灰 N6/	暗灰 N4/	灰白 7.5Y7/1	灰白 7.5Y7/1		
49	NK/ SK8	磁器	広東 形碗	11.6	11.7		6.5	染付	(見)寿文	草花文					肥前系	
50	NK/ SK8	磁器	碗	底部	(2.6)		3.4	染付	区画、線状紋							

表4. 遺物観察表 4

調査区 No.出土遺物	器種	器形	部位	法量 (cm)				特徴	形態・文様		色 調		備考	
				口径	器高	胴径	底径		内面	外面	内面	外面		断面
51	NK/ SK8	陶器	鉢 底部	(3.3)		5.2	京焼風	灰軸	灰軸	浅黄 2.5Y7/3	浅黄 2.5Y7/3	灰白 5Y7/2		
52	NK/ SK8	磁器	紅皿	4.6	1.6		1.2 肥前		露胎				19世紀	
53	NK/ SK8	磁器	紅皿	4.6	1.6		0.8		露胎					
54	NK/ SK8	磁器	皿	全長 (4.9)	全幅 (3.1)	全厚 (2.4)		染付、口髹	草花文				型打ち 成形	
55	NK/ SK8	土師質 土器	灯明 皿	6.9	1.1		4.0	口縁の一部に 煤が付着する。		(外底) 糸切り痕	浅黄橙 10YR8/3	灰白 2.5Y7/1	黄灰 2.5Y8/3	
56	NK/ SK8	陶器	鉢 口縁	(14.4)	(4.1)				灰軸(黄緑色) 口ケ目	灰軸(黄緑色) 5Y8/3	淡黄 5Y8/3	淡黄 5Y8/3		
57	NK/ SK8	土師質 土器	焙烙 口縁	(4.2)					煤付着	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR6/6	灰白 7.5YR7/4		
58	NK/ SK8	陶器	鉢 鉢	7.8	4.7		5.2			(口)輪割ぎ (底)露胎	明緑灰 7.5GY8/1	灰白 2.5Y8/2	基筒底	
59	NK/ SK8	陶器	灰入 れ 口縁	10.4	(11.9)			釉垂れ	露胎	緑胎				
60	NK/ SK8	磁器	碗 底部	(1.3)			4.8	染付、胎土は 灰色を帯びる。	(見)花卉					
61	NK/ SK8	陶器	碗 底部	(2.0)			5.9	太白焼。 広葉形。	(見)玉弁花	(墨)輪割ぎ、 器着部の削り痕		浅黄 2.5Y7/3	瀬戸・ 美濃	
62	NK/ SK8	土師質 土器	羽釜 口縁	11.0	(6.9)					胴部にクロロム、 煤付着	灰白 10YR8/2	浅黄橙 10YR8/3	灰白 2.5Y8/2	
63	NK/ SK8	土師質 土器	坏	11.9	3.8		6.8	器面の後、口縁 は大きく広がる。		煤付着	にぶい橙 7.5YR7/4	黄灰 2.5Y4/1	にぶい橙 10YR7/3	
64	NK/ SK8	石製品	石鏝	全長 12.2	全幅 5.8	全厚 2.9	重量 309g	砂岩製、長楕 円形をした河 原石の両長辺 中央部を打ち 欠く。						
65	NK/ SK8	陶器	鉢 口縁	(3.3)				鋳子	鉄軸(鉛軸)	鉄軸(鉛軸)、 刻み	黒褐 7.5YR3/1	にぶい黄橙 10YR6/4	灰白 5Y7/1	
66	NK/ SK8	陶器	鉢 口縁	(3.9)				呉器手	灰軸(緑灰軸)	灰軸(緑灰軸)	オリーブ 5Y5/4	オリーブ 5Y5/4	灰白 5Y7/1	
67	NK/ SK8	陶器	楕鉢 口縁	(7.4)							にぶい赤褐 2.5YR4/3	灰赤 2.5YR4/2	赤 10R5/6	
68	NK/ SK8	鉄製品	釘?	全長 (12.5)	全幅 (2.0)	全厚 0.3	重量 54g	板状						木質が 付着す る。
69	NK/ SK8	石器	卵石	全長 18.0	全幅 10.9	全厚 5.6	重量 1542g							砂岩製
70	NK/ SK9	磁器	皿 口縁	16.4	(2.5)			染付	宝紋	葛草				
71	SK10	磁器	壺 笠部	全長 (4.8)	全幅 (4.7)	全厚 (1.0)			指頭による 押圧痕。	銅緑軸。 白化胎土。	灰白 5Y8/1			
72	SK/ SK10	磁器	碗 底部	(3.9)			3.8	染付、 コンクリート軸	(見)“寿”					
73	SK/ SK10	磁器	皿 底部	(4.6)			2.9	染付	蛇ノ目輪割ぎ					飯佐見
74	SK/ SK10	陶器	摺鉢 口縁	31.0	(7.6)			10条1単位の 摺目。			灰赤 2.5YR5/2	赤灰 2.5YR4/1	にぶい赤褐 5YR5/4	
75	SK/ SK10	土製品	瓦 軒平瓦	全長 (2.0)	全幅 (10.0)	全厚 (3.8)					灰 5Y4/1	灰オリーブ 5Y5/2		
76	SK/ SK10	土製品	瓦 軒平瓦	全長 (11.0)	全幅 (12.0)	全厚 6.5		瓦面に葛草。 断面は山形を 成す。			灰 7.5Y4/1	灰 5Y7/1		
77	SK/ SK10	石製品	石鏝	全長 15.0	全幅 9.1	全厚 4.8	重量 990g							

表5. 遺物観察表 5

図 No.	調査区 出土遺物	器種	器形	部位	法量 (cm)			口径	特徴	形態・文様		色 調			備考
					口径	器高	胴径			底径	内面	外面	内面	外面	
78	SK1/	土師質 土器	燈焼	口縁	(52.6)	(4.3)					煤付着	にぶい橙 7.5YR6/4	黒 7.5Y2/1	にぶい橙 7.5YR6/4	
79	SK1/	陶器	摺鉢	口縁	14.0	4.1			(口)1条沈線	(口)1条沈線	にぶい赤褐 2.5YR4/4	灰赤 2.5YR4/2	灰褐 5YR4/2		
80	SK1/	陶器	瓶	底部	(8.4)	8.7	7.6		ナデ、露胎	灰輪(白濁)、 (底)露胎	にぶい黄橙 10YR6/4	灰黄 2.5Y7/2	にぶい黄橙 10YR7/3		
81	SK1/	磁器	瓶	体部	(3.8)		(12.9)	染付	刷り	草花文	灰白 2.5Y7/1	明焼灰 7.5GY8/1	灰白 N8/		
82	SK1/	陶器	瓶	底部	(4.3)		5.2	呉器形	灰輪(緑灰色)	灰輪(緑灰色)、 ロクロ目	灰 5Y6/1	灰オリーブ 5Y6/2	暗灰黄 2.5Y5/2	軸は白 濁する。 肥前 懸付け に砂粒。	
83	NEK/ SK18- SK8	磁器	広東 形碗		11.2	7.1	6.4	染付	(見)寿文	雲紋/楓紋					
84	NEK/ SK18	陶器	瓶	底部	(4.2)		6.1		露胎	鉄軸	にぶい黄 2.5Y6/3		にぶい黄 2.5Y6/3		
85	NEK/ SK19	磁器	杯	口縁	6.6	(2.9)			口縁は大きく 外反する。						
86	NEK/ SK20	磁器	書置		9.2	2.9		3.5	染付、陶反り						
87	NEK/ SK20	磁器	丸形 碗		10.3	6.0		3.8	染付	網目紋、 (見)渦?	波紋			肥前 懸付け に砂粒。	
88	NEK/ SK20	磁器	碗	口縁	11.0	(2.5)			染付	(口)二重圓線	草花文、部貫入				
89	NEK/ SK20	陶器	碗	口縁	12.3	(6.8)			呉器形	灰輪(淡青灰色)	灰輪(淡青灰色)	灰白 5Y7/2	灰白 5Y8/1	黄灰 2.5Y6/1	
90	NEK/ SK20	陶器	碗	底部	(3.9)		9.2		底部にハリ状 の足が付く。	ロクロ目、露胎	灰輪(緑灰輪)、 露胎	にぶい黄褐 10YR7/3	にぶい黄 2.5Y6/3	灰黄 2.5YR7/2	煤が付 着する。
91	NEK/ SK20	陶器	高	底部	(6.1)	9.8	8.0			ロクロ目、露胎	鉄軸、露胎	灰黄褐 10YR5/2	黒 2.5Y2/1	暗灰黄 2.5Y5/2	
92	NEK/ SK20	陶器	摺鉢	口縁	(8.6)						にぶい橙 7.5YR5/3	にぶい橙 7.5YR5/4	にぶい黄橙 10YR6/4		
93	NEK/ SK20	瓦質 土器	火鉢	把手	全長 (5.3)	全幅 (3.3)	全厚 (2.6)				炭素吸着、漆痕	灰 7.5Y6/1	灰 N4/	灰黄 2.5Y7/2	
94	NEK/ SK20	瓦質 土器	火鉢	脚	全長 (4.8)	全幅 (3.0)	全厚 (1.5)				漆痕	灰 N4/	灰白 2.5Y7/1		
95	NEK/ SK20	瓦質 土器	火鉢	底部	全長 (6.2)	全幅 (4.3)	全厚 (2.7)			ナデ	陽刻による銘、 漆痕	灰 5Y6/1	暗灰 N3/	灰白 2.5Y7/1	
96	NEK/ SK20	瓦質 土器	灰入れ	口縁	(29.6)	(5.1)			器面の炭素吸 着は少ない。 (脚)直径1cm 円形の透かし。		灰 5Y4/1	灰 5Y5/1	灰黄 2.5Y7/2		
97	NEK/ SK20	土師質 土器	燈鉢	口縁	15.7	(8.2)				刻み、煤付着	黒褐 2.5YR3/1	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4		
98	NEK/ SK20	陶器	罎	底部	(2.4)		6.0		ナデ	煤付着	浅黄褐 10YR8/4	黒 10Y2/1	灰黄 2.5Y6/3		
99	NEK/ SK20	磁器	罎	口縁	(1.7)				染付					肥前	
100	NEK/ SK20	陶器	罎		8.5	4.6		2.7	鉄軸が粘土に 滲む、陶反り。			灰オリーブ 7.5Y3/3	灰オリーブ 7.5Y3/3	暗灰 7.5R3/6	灰白 2.5Y8/1
												灰白 5Y7/2	灰白 5Y7/2		

表6. 遺物観察表 6

調査区 尾川上遺跡	器種	器形	部位	法量 (cm)				特徴	形態・文様		色調				備考
				口径	器高	胴径	底径		内面	外面	内面	外面	断面		
101	NEK/ SK20-1	陶器	皿	口縁	13.2	(3.5)			灰緑(緑灰色)、 (見)蛇/目 刺刺ぎ	灰輪(緑灰色)、 藍胎	灰オリーブ 5Y5/2	灰 5Y5/1	灰 5Y5/1		
102	NEK/ SK20・ SK8	磁器	皿		22.6	3.9	12.2	桜花画、染付	鳳凰(家、月)	(黒)輪刺ぎ、 砂粒浮着					
103	NEK/ SK20-1	陶器	鉢	口縁	18.6	(5.3)	18.4		灰輪(灰褐色)、 (受)露胎	灰輪(灰褐色)	にぶい黄緑 10YR6/4	浅黄 2.5Y7/3	にぶい黄緑 10YR7/4	雪平編	
104	NEK/ SK20-1	陶器	鉢		19.8	12.9	10.0	口縁下に注口 部を穿つ。			にぶい黄 2.5Y6/4	オリーブ黄 5Y6/3	灰白 2.5Y8/2		
106	SK/ P4	須恵器	坏	口縁	14.8	(2.9)		口縁は直線的 に外上方に立 ち上がる、口唇 は丸く修める。			灰白 7.5Y7/1	灰白 10Y7/1	浅黄 2.5Y7/3		
106	NEK	磁器	杯		7.7	3.6	3.5	染付	6~7条源鰯、 (見)魚	(高)「シ」				銚茶山	
107	NEK	磁器	碗	底部		(1.5)			(見)五弁花	青磁軸	灰白 7.5Y7/1	明オリーブ灰 6GY7/1		広瀬 岡山	
108	NEK	磁器	丸形 碗		15.6	6.1	4.3	染付	(見)宝紋	帆蒸舟、 (高)角内茶山				銚茶山	
109	NEK	磁器	鉢	底部		7.9	11.2	染付	斜格子、 (見)草花文	吉草文				肥前 豊付に砂粒。	
110	SIX	陶器	甕	口縁	(42.0)	(5.9)		口縁は粘土貼 付により肥厚 する。			褐灰 5YR4/1	褐灰 5YR5/2	赤褐 5YR4/6		
111	SIX	陶器	甕	口縁	(43.0)	(7.3)		口縁は粘土貼 付により肥厚 する。			黒褐 5YR3/1	褐灰 5YR5/1	にぶい黄 5YR6/4		
112	NEK	石製品	石鏝		全長 7.6	全幅 4.5	全厚 1.5	重量 87g	チャート製、 小型						

表7. 遺物計測表 (土製品・銅銭)

## 土製品計測表

遺物No.	出土地点	内容	長さ	幅	法量 (mm)	
					厚さ	重さ(g)
D-1	SK7	恵比寿	18	16	7	1.9
D-2	SK16	おかめ?	23	20	7	2.0
D-3	SIX	—	26	21	7	2.2
D-4	SIX	鬼	20	20	8	1.9
D-5	SK7	鳥	27	13	5	1.3
D-6	SK16	猿	26	18	6	2.2
D-7	SK16	貝	23	24	8	2.4

## 銅銭計測表

遺物No.	出土地点	内容	長さ	幅	法量 (mm)	
					厚さ	重さ(g)
M-1	SK7	—	25.0	23.0	2.1	2.4
M-2	SK8	—	23.0	23.0	1.5	1.8
M-3	SK8	寛永通宝	—	23.5	2.0	1.3
M-4	試掘調査TR1	寛永通宝	23.5	23.0	2.0	2.4

#### SK17

平面図は図18(P31)、遺物図は図25(P38)、写真PL.20・29

調査S区の南西隅で検出した土坑である。調査は遺構全体の約1/3程度であろう。規模は開口部で幅1.7m、底部では幅0.9mを測る。埋土は概ね暗灰褐色土(調査S区南壁Ⅲ層)であるが、東半には砂質の顕著な部分が認められ、西側の一様な埋土の状態と異なる。土坑底部は砂層を掘り込んだ後、黄色粘土を敷いている。底面近くでは20cm大の円礫が出土している。東半の砂質が顕著な部分では板または木の根状の炭化木があり、二枚貝の貝殻も出土している。

出土遺物は、磁器の染付瓶(81)、陶器の灰釉碗(82)を図示した。他には、磁器の碗、瓶、陶器の碗(京焼風、灰釉、白灰釉)、鉢(鉄絵)、瓶(白灰釉)、播鉢、甕、瓦、砥石、鉄製品の釘、二枚貝などである。

#### SK21

平面図は図9(P14)、写真PL.20

調査S区の東南部、東壁セクションで確認した土坑である。規模は上面が幅56cmであり、底部は約20cmを測る。底部の標高はおよそ6m50cmである。調査S区の東壁Ⅲ層から掘削された土坑であり、埋土は暗灰褐色土で15cm大の円礫を含んでいる。

#### ビット

平面図は図18・19(P31・32)、遺物図は図26(P39)、写真PL.30

検出したビットの多くは、N区北壁の7層上面に薄く堆積した締まりの強い明褐色～明灰褐色の砂～砂土層を埋土としている。腐植によるものか、炭化物を多くその底部で含んでいる場合がある。人為的な掘削によるものとは考え難いものも多く、上層構造が伴うような遺構は確認できていない。P13では円礫を底部に伴っている。下層である砂層には人頭大以上の円礫が所々含まれている。N区北壁のように円礫が並んで検出される場合もあるが、平面的に多くの場合遺構として捉えられない場合が多い。

出土遺物は、P4から出土した須恵器の坏(105)を図示した。

#### 包含層からの遺物

遺物図は図26(P39)、写真PL.30～32

106は能茶山産の磁器染付小碗である。107は肥前産の青磁染付碗である。108は能茶山産の磁器染付碗である。109は肥前産の磁器染付鉢である。110と111は何れも大型の甕口縁部と考えられ、枠構造を持つ土坑に関わるものであろうか。最後に112は石錘で下部砂層からの出土であり、P10の上面に当たる。ビットの項で述べたように締まりのある砂層部分に相当する。各遺構から出土した石錘と用途を異にするものであろう。

#### 4. まとめ

##### 遺構

調査の結果からここでは主に発見された遺構についてそれぞれの機能した時期や性格について考えたい。尚、今回の調査で見つかった遺物の中には古代の須恵器坏や土師器甕などがあるが遺構に伴う遺物は概ね近世、18世紀以降のものと考えられ、遺構についてもその時期を大きく離れはしないものと捉えている。

SK8-NとSK8-Sは土質的な性格を持つ。SK8-Nからは寛永通宝が出土しており、SK8-Sではかわらけと円鏡が床面に置かれた状態で出土している。遺構の内部構造、棺の形態や存在に言及することはできないが、上層の埋土は両土質に共通しているようで変化が見えないことから、改葬の可能性もあるのだろうか。この二つの遺構は構造的に黄色粘土を床に用いるもので、同様に粘土を厚く敷くSK10と性格は異なるが、土坑の設置に際して同じ工夫を施したもので、時期的には重なるものであろう。前節で述べたように、SK10と同様な規模や形態を持った遺構は近世の終わりから近代に機能した遺跡で多く見られ、香我美町山北にある重要文化財安岡家の建て替えに伴う調査では近世住居の台所(釜屋)部分から「煙」遺構が見つかった。SK10が屋敷内にあったものか断定はできないが、岸本の街路に面する民家には短冊形の土地に、道に面して主屋があり、座敷や居間が配される。狭い通路が奥に延び、裏庭に近い部分の主屋と対峙した別棟に浴室、便所が設けられる構造のものを見ることができた。同時期に存在したとするならば、先のSK8-NとSK8-Sは屋敷敷のなものであったのだろうか。

SK8-Nより新しいSK7は、恐らく当時の地表を掘り込んで造った半地下式の構造物で竈または炉と考えられる。本文で指摘したように、石組みや遺構底面には被熱の痕跡が明瞭ではなかった。ただ、SK7から炭片が多く出土しており、付随する硬化面の存在も含めて考えると、大きな容器が石組みの上に載り、下から加熱するものであろう。この遺構を特徴付けている硬化面は、液体を暖める際に溢れ形成されたものと思われる。可能性としては、塩生産に関わる釜屋や湯屋の存在を想像する。SK7付近で出土が目立った木質の付着した板釘から推すと湯屋に関わるものとすることもできるだろう。後述するが、明治12年の『香美郡町村誌』に見られる岸本村の生産品には塩、食塩が見られないので後者の可能性が高いとおこう。本文では、SK7-1の機能時期をSK7と同時にまたは以降としておいたが、試掘調査のTR1西壁で枠構造を持つ土坑が確認されており、煙道か煙突と考えられていた。ここでも土坑枠の一部に硬化面が残されているので、SK7を中心として対称位置に同程度の土坑を配した構造も考慮できるだろう。中心部分で発生する余熱を利用して、対象物を予め暖めておくことを目的としたものか。

SK9、SK11～SK15、SK18は規模の小さな土坑群で、内部に大型の甕などを伴うと考えられる。しかし、出土遺物の中には大型の甕口縁部が僅かに見られるのみで、何の製造に関わるものかは言及できない。尚、これらの土坑の機能時期はSK8-1と同じ頃と考えている。

SK3・4とSK5・6は内容物に違いは認められるものの焼土や灰を伴うもので、先述の安岡家釜屋跡の遺構と共通する部分が多くあり、竈か炉の跡と考えている。両者にやや間隔の開きがあるので一連のものではなく時間差があるのかもしれない。SK5は漆塗の破片をブロックで含んでいて、これ



は竈本体を造る時に使われたものか、所謂石窯と呼ばれるような石と漆喰で造られた大きな容器の一部であるかは判断できない。

SK1は井戸跡で、コンクリートの枠を打って揚水用のポンプを設置している。井戸からポンプへの導水管は井戸枠を打ち欠いて穴を開けて通したもので、コンクリートの枠も底面を除けば、壁の厚みはまちまちで隅角には隙間も見られ決して上手く仕上げたものとは見受けられない。井戸の機能時間に対して、ここに置かれたポンプの機能時間は短かったのだろうか。何れにしても、枠の設置と同時にポンプが据えられたとは考え難い。

ここで、土坑群の中で砂を起源とする埋土を持つものについて触れておこう。本文でも述べたように、表土(盛土を含む)の下には、概ね砂質の土層、砂層起源の旧表土がある。恐らく、SK17やSK21はこの旧表土を埋土としている。SK20もこれと同じ出自と考えられるが、残念ながら土坑の上層が確認できていない。試掘に於けるTP1とTP2で見つかった土坑も同じように砂層を掘削しているのだが、特に壁面を補強するでも無く、崩壊を防ぐための配慮を施した形跡は認められない。SK20は出土遺物が多く、破片も大きなものが目立っている。断面を観察したところでは比較的短時間で埋まった可能性が高い。廃棄土坑であろうか。SK17では底面に黄色粘土を敷いており、他の土坑と様相を異にしている。SK17とTP2の土坑では薄い炭化物層を埋土中に伴っている。ただ廃棄を目的とした土坑にしては、丁寧過ぎる造りかもしれない。

さて、これら土坑の機能時期であるが、大きく四つのグループに分けて考えてみたい。「SK8(SK8-N, SK8-S)とSK10」「SK7とSK20など」「SK11とSK9など」「SK1とSK2など」となる。これらを大まかな時間軸の中で並べてみた表である。遺構間の埋積関係からSK8はSK7に先行する。またSK10はSK11に先行する。SK7とSK7-1は今仮に同時期のものとした。出土遺物の接合関係からみるとSK8-1とSK18、SK20とSK7がそれぞれ同時期に機能した可能性がある。(注1)

最後に、遺構の中には当時の生活に関わるもの他に、産業や生産品に関わるものが少なからずあるだろう。ここでは、『香我美町史』や明治12年の『高知県香美郡町村誌』の内容を通して、今回の調査で発見された遺構や遺物を見ておきたい。

製塩は、『長宗我部地検帳』には“塩浜”と記載があり、香南市域海岸で広く行われていたようである。土佐湾岸の砂浜で行われた製塩は、揚浜式と呼ばれるものの範疇に入るもので、干満の差が少ない太平洋岸の砂浜で採用されていた製塩方法である。人力により海水を浜まで汲み上げ砂浜に撒き、乾燥させた後に、砂を集めて海水を掛けて砂に付いた濃い塩分(鹹水)を得る方法である。

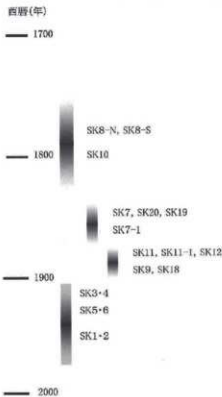


図28. 遺構の時期

江戸時代に主流となり、昭和30年代まで瀬戸内海を中心として各地で行われていた入浜式に於いても、鹹水を得る為には砂の管理など、かなりの重労働であったとされている。揚浜式はそれに比べても、尚効率的な悪い採塩方法であった。岸本では、寛保二年(1742)に塩浜は12.1浜に減ったとされており、先述のとおり明治の初めには塩の生産は見られない。江戸時代には、四国の山間部で太平洋からの塩と瀬戸内からの塩が競合するといった場面もあったとされるが、近代には淘汰されたと考えられる。(注2)

岸本に湯屋商としての記載が見られる。町史や地元の方の話にも出てくる商いであり、木質付着の板釘や水の得やすい条件などかなり高い確率でそれを支持している。

『香美郡町村誌』の記載に見られる産業としては、山北や山南、徳王子で生産される葉藍を用いた染色が考えられるだろう。職人の項目として紺屋が、商家として染物屋が挙げられている。現在も染色工場が岸本にはある。藍染めの工房に於ける、染料の保温を目的とした埋め瓶が、幾つか設けられていた可能性がある。

また、小型の枠構造を持つ土坑群や半地下式の石組み土坑は酒造に関わる遺構の可能性もある。『香美郡町村誌』には岸本で酒89石の産高が記録されていて、他の町村と比べて多くはないが酒造業の存在が認められる。昭和初期の資料では銘柄「松雪」「玉柳」の記載がある。

遺物には砥石と石鏝が一定量ある。砥石は集落という背景もあるが、石鏝は平面形槽円形の河原石の長辺中央を単純に打ち欠いたもので、内陸にある古い時期の遺跡で出土する石鏝と比較すると大型である。石鏝に関わる職は漁師である。岸本村の漁業について『南路志』では、地引網船11艘、地引網11張等の記載があり、春(鯉・鯛・サコシ・サワラ)、夏(鯛・鯉・小鯛)、秋(鯛・鯉)、冬(鯛・サコシ・サワラ)の魚が沿岸で捕れると記している。『香美郡町村誌』では民業として漁業に携わる人口の記載は見られないが、物産高では岸本で鯛1500丁の記録がされている。『香我美町史』によると鯛は当時干鯛(ほしか)や生鯛として流通しており、肥料としても重要なものであったとされている。するとこれらの鯛の多くは、他所で水揚げされたものを、岸本で加工し、海産物として出荷されたものであろう。商家としては、産物商や魚屋の記載が見られる。海に関わる職業として宇田町の廻船問屋増田屋があり、新町には、水主が多く住んでいたとされている。市艇(いさば)や生魚船を使用して関西方面への物品の輸送に携わったとされている。

(注1) 近世のものと判断した根拠となる遺物には、以下のようなものがある。TP1の土坑床面で見つかった肥前波佐見産の染付皿(T-4)は17世紀末の流通であり、18世紀代の呉器形の碗(T-5)と共存している。SK20からは、広東形の碗や能茶山産の磁器が出土しており、1820年代以降の製品と考えられる。

(注2) 揚浜式塩田については、「坂州市立塩業博物館」「赤穂市立海洋博物館」の展示等を参考にしました。

## 調査区の堆積

岸本飛鳥神社西遺跡の調査における地下の堆積状況は前章で示したとおりであるが、ここではより簡潔に遺跡の堆積環境を概念図で示した。ここからは、この概念図に即して遺跡の立地を考察してみたい。

堆積土層は上から、表土(ここでは1層)、灰色砂土、灰褐色砂土、灰色砂層が確認されている。

表土には耕作を目的とした客土のような土層も見られるが、この砂堆を起源とするような表土は確認できなかった。殆どの遺構は表土と切り離された埋土を持っている。

本文でも述べたように表土下には砂層起源の旧表土が堆積している。調査区の北側では不明瞭であるが、南へ寄るに従い分層が可能で2～3回の土壌化があった可能性がある。東壁では2回の土壌化が確認される(ここでは2層、3層)。このうち上位の堆積層である2層はSK17やSK21の埋土と関係が深いものと考えられる。2層の堆積後に埋積された土坑と考えられる。

3層は2層と同じく土壌化した土層である。東壁では2層と3層の間に未土壌化の砂層がある。これは2層の土壌化した部分と同じ時期に堆積したものと考えられる。3層にも同じように、同時期に堆積した部分で土壌化を受けることの無かった部分があると考えられる。もちろん南壁のように2層下に間層と捉えうるような未土壌化部分を確認できない箇所もあるであろう。こういった状況を考慮しながら堆積状況を見て行くと、砂層起源でかつ締まりのある3層直下に土壌化を受けていない薄い堆積部分があり、北壁では一部で古代の土器の出土が見られた。これを土壌化しなかった3層下部とするならば2層と同程度の堆積があったと考えて良いだろう。

4層は、砂層の堆積で上面から約1mまで同様な堆積状態が続きやがて砂粒が大きくなり、砂礫へと粒径を増してゆく。残念ながらこの堆積がいつ頃、どんな環境で成立したのかを知る手がかりは調査中に見つけることができなかった。前節ではあまりこの4層について触れなかったが、4層の構成は主体が砂粒で、小円礫が少ないながらも一定量含まれている。人頭大から稀に一抱えもある円礫も出土している。この円礫が等間隔で並ぶ様子がN区北壁では確認された。恐らく人為的に置かれたものと考えられるが、調査の中で他には発見されていない。(注1)

砂層の形成過程について語る能力を私は持たないのであるが、調査の当初個人的に砂丘に関わる堆積層と考え、この層については風成層と単純に考えていた。しかし、砂丘に見られる風成層には小礫など粒径の大きなものや重いものは淘汰され残り難い。香南市域の砂堆においても、部分的には風成層が形成されていて、その部分には、小礫も混在しないほぼ一様な砂粒の堆積状態が見られる。よって、この層についても、風成層ではないと考えて良いであろう。(注2)

さて、この厚い砂層(4層)を単独での同時期堆積と見た場合、上部には土壌化を受けた痕跡が残されていない。4層堆積後、早い段階に3層が堆積したのか、何らかの要因で表土化した上部が

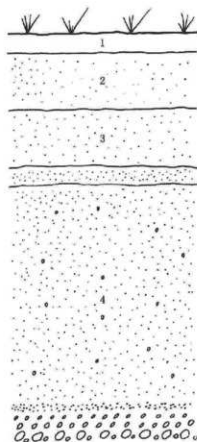


図29. 調査区内の堆積

削られ、3層が新たに堆積し、土壌化を受けたと考えることもできるだろう。その場合、3層下の古代出自の土器や4層上に残されたピットに古代の遺物が含まれていることから、4層が古代以前に形成されたとする可能性は否定できない。また、3・4層の形成時期が同じで3層が土壌化を受けた部分だとすれば、2層形成よりは先行する江戸時代後期以前となるだろう。可能性は後者が高いが形成時期を明確にする遺物の出土はなかった。

(注1) 等間隔で置かれた円礫は、可能性として地域を示すためのもので、今でも砂堆上に経営される品などの区画で散見される。

(注2) 先述のように、この砂層については、近藤康生氏と奈良正和氏等に現地で教示を受けることができた。また、吉川町松ヶ瀬の津波避難タワー整備に伴う試掘では、砂堆後背側の堆積状況を確認し、砂粒で構成された(風成)堆積層を確認することができた。調査区内のこの砂層(4層)については、海成と考えた場合どういった過程で、この砂層が形成されたのかは、今後の課題としておきたい。

### 飛鳥神社とその周辺

調査区では近世よりも古い遺物として古代の土器が出土している。しかし、これらは遺構に伴うものではなく、また当時の生活面の形成を示すものでも無いようだ。すると、18世紀以前のこの辺りの景観はどのようなものであったのだろうか。そして、飛鳥神社はいつ頃からここにあったのだろうか。以下では、16世紀末の様子を『長宗我部地検帳』で見よう。

『長宗我部地検帳』では、大忍庄の遺跡周辺に関わる検地の様子が誌されている。検地では、上高田ノ川イエ西大塚ヲ詰テ理有 是ヨリ川ヲ渡 相見村

の記述があり、

中テウ大塚詰テ	ハリノ本西大境道ヲ詰テ	窪国本ハ四反
スエ国大塚道ヲ詰テ	フカタ道添	土器田

と続いている。これは『香我美町史』のホノギ図で王子村の「高タ」辺りから現在の香宗川を渡り、「下高田」辺りから南へと検地が行われたことを示すものだろう。「土器田」には“アスカノ宮土器田”とあり、“スエナカノ内”の記載が見える。ホノギ名から、

—	ハリノモト	窪国
末国	深田	—

と検地が行われたと推定できる。その後には、

岡ノ後郷ヨリ南大塚詰テ川イエ 自是赤岡川渡堺印目アテ有 今在家村

の記述が見えるので香宗川(赤岡川)を渡った事が窺える。

同じノ上今在家浜ヤシキ 西大塚詰テ	ハネヤシキ	持宝寺ヤシキ西ノ大塚ツチ ネ北ハ山ツメテ外ノホリ限
又太郎ヤシキ	四郎兵衛ヤシキ南ハ浜ヲ 詰テ	左衛門三郎ヤシキ北ハ川 詰テ
八郎左衛門ヤシキ	六郎衛門ヤシキ	神左衛門ヤシキ

の記述が見られ、その内容はスナヤシキや下ヤシキ、シハヤシキであると伝えている。ホノギ園にあるのは最初の「岡の後」の名前のみで、他の「柳の本」「松の下」「江見村」などの記載は見られない。

西ノ大境ハ森岡限東ノ境吉野浜ヲ詰テ以上 赤岡村

一ノ塩浜式拾壹浜内 今在家浜

香宗様御扣

と『地検帳』当時は「岡の後」の南側は浜となり塩田が広がっていることが窺える。

続く“江見村”の記載は、

トリカコウ田川イエ 江見村

で始まり、

同しノ東道懸テ三ツ又瀬 アカリ付川イエ	鳥カコウテン	アスカノ神田
アライ	青イ	ヲサル
大サルノ同しノ東	ヲウサルノ同し東	大サルノ同し東川淵
亀田川イエ	ナカン丁東川ツメテ	ナカン丁川淵共
高ハ	高ハヒキチリ	ナカ丁ノ北川ツメテ

と巡っている。対応すると思われるホノギ名は香宗川の北に位置する

鳥川神田	←	飛鳥神田
青井	←	ヲザル
←	←	←
—	—	—
—	—	—

であり、香宗川西岸を北上したのであろう。また、このとき“江見村”での土地利用の内容は田畠であり、“アスカ宮修理田”と記載されている部分もある。

『地検帳』では、これに続いて“王子ノ村”の記載がある。香宗川東岸の丘陵と砂堆の間で検地が行われたことを示している。それは、

□供田 王子ノ村

で始まり、

サマイタ本ハ式反	道マタゲ東西懸テ本式反	エノキダ
マカタ本老町	アナタ	カケ道ソエ本ハ四反
ヤカイ川淵	ヤカイ	ヤモウト本ハ三反
ヨナワク	ヤカナ川淵	亀田
亀タ	カメタ	道ヌケ
ニシヲタ	同しノ北横マクラ川詰テ 本ハ老反冊	同しノ西スシニ両川

と続く、これはホノギ図で「御供田」、続いての

ササイタ	道又ギ	上エノキ田
—	穴田	—
ヤカイ	←	ヤマウド
ヨナツグ	↑	亀田
←	←	—
ニシキ田	横枕	—

に対応するものであろう。□には御が入ることになる。土地の内容は水田であろう。

検地は南へ向かい三又瀬村へ、こう誌されて始まる。

ニシヨタ横マクラ本老反廿代 三又瀬村

ミツ又瀬東路	石田芝詰テ北チ塩入	石田川イエ共ニ塩入
スコウ塩入	丸田塩入	横テ塩入
同シノ北ノナカ塩入	ノナカ塩入	弓タ塩入
ツノツクリ塩入	川窪	ヨナツク本ハ四反
ヒラタ本五反	ウシカイ	ヤマウド
アナタ本五反	シトロ	

とあり、南から千島方式に北へ続いている。ホノギ名では、

ニシキ田・横枕	石田	←
スコウ・スコウ塩入	—	横手塩入
野中	←	弓田
角ツクリ	川久保	ヨナツグ
平田	ウシカイ	ヤマウド
穴田	ミドロ	

になるであろう。土地の記載には塩入が多く見られる。

ここまで『長宗我部地検帳 香美郡 上 大忍庄』の相見村、今在家村、江見村、王子村について記載されている地名を手掛かりとし、『香我美町史』によるホノギ図と照らし合わせることで大まかではあるが、どのような順序で検地が進んだかを見た。この過程で、検地当時の地形や土地利用が、基本的にはホノギ図と変わらないものであったことが分かる。例えば、この周辺にある河川・流路の名前は、造えているけれども、概ね図のようにあったと考えられる。だが、江見村は地検帳では香宗川の北に展開する主に水田であるが、ホノギ図では江見村が砂堆上に展開する空間として記載されていて、それは現在の江見町の景観に繋がるものなのだろう。『地検帳』との齟齬は後回しにして先に進む。

岸本村の記載は、次のようにして始まる。

ハシモト西ノヨリ塩入 岸本村

から始まり、“横田塩入”“笠松ハマノソエ”と続く。次に、

西ノヨリ詰テ新浜籠大ツイチノ内 同村はハ野中肥後守抱分也

一ノ老町 新浜ヤシキ 新浜分

との記載がある。以下には塩浜が続く。

今在家ノ境東境浜 自是塩浜 野中肥後守抱



とあるヤシキの記載はないが“吉野浜”に14の塩浜があった事になる。その東は、

吉ノ浜境西ノハシ 自是国吉御扣新屋敷分 国吉浜  
 国吉御抱シテ浜 自是塩浜

とあり、9筆のヤシキと塩浜が海岸近くにあったのであろう。ホノギ図ではチノ丸と南の海岸であるトノ丸に推定される。その東は、

惣喜浜  
 一ノ八反 宗喜浜

とあり、ヤシキと荒地があった事が分かる。海岸については続く記載として、

国吉ノ塩浜同しヨリ 宗喜塩浜

とあるので塩浜であったのであろう。10筆の塩浜があり、さらに東へ塩浜が“同し城ノ下”まで25浜続くことが記載されている。“城”とは姫倉城と考えられるから、岸本の海岸には月見山下までの間58筆の塩浜があり、加えて今在家や赤岡の塩浜を考えると、塩の一大生産地帯があったことになる。(注1)

さて、『地検帳』には“アスカノ宮土器田”とか“アスカ宮修理田”の文字が見えるが、社殿の位置を明らかにするものは見られない。飛鳥神社は現在、長宗我部元親が整備し、若一王子宮に寄進したとされる神幸道(八丁道)の突き当たりがあるので、当時もここにあったものと仮定すれば、今回の調査区を含めたホノギ図の「リノ丸」に当たるであろう。岸本については、古いホノギ地名が明らかではないが、ホノギ図の「イノ丸」は『地検帳』で“岸本村”の検地が始められた“ハシモト”と考えられ、「リノ丸」はそれに続くホノギと考えられる。ここには、“新浜渡大ツイチ”や“新浜ヤシキ”の記載が見えるので、新しくできた浜であり、不安定な土地であることが言えるだろう。“ツイチ”は築地に関わる表現であろうから、崩や土手に囲まれた土地だろうか。また、『地検帳』には“アスカ”の文字は見えるが、“飛鳥”の字は見られない。“スカ”は砂丘を意味するものであるから、“アスカ”は元々、地形や地名を指した言葉なのだろうか。(注2)

ホノギ名「イノ丸」「リノ丸」に相当する部分の『地検帳』に記載された面積と“岡の後”に於けるヤシキや田島などの記載面積、それらとホノギ図から求めた面積に開きが存在する。これは、野中肥後守が抱えるこの土地と、“岡の後”の間に空間が存在したことが考えられ、該当する土地が河川などの影響を受け易い土地であり、人による改変が加え難い環境にあったことを示すものだろう。(注3) 第1章で述べた赤岡町の本町辺りに残る凹地形は、ここに繋がるものであった可能性がある。また、野中肥前守という人物は、後の飛鳥神社と考えられる一町規模の土地とヤシキ、加えて南に“吉野浜”という塩浜をも所有していた。(注4)

(注1) 吉野浜から城ノ下まで580間(1間を6尺3寸、約1.9mとすると1.1km)になり、今の香宗川放水路の辺りになる。つまり、飛鳥神社の南辺りは吉野浜であったと考えられる。

(注2) 『地検帳』には、“芝草簾”などの記述があり、土地利用の様子を表している。“新橋内”は館や社に関わる記述であろうか。ここでは、“籠”は後者に関わる参籠を意味するものや、囲いの意味もあるのだろう。

(注3) ホノギ図から求めた土地の面積と『地検帳』に記載された土地の面積を比較すると、河川に近い土地では図から求めた面積と記載された面積との隔たりが大きく、また離れた土地では小さいことが分かる。例えば『地検帳』に見える相見村の“窪田・”“スエ田”“フカタ”の記載された面積とホノギ図の“海田”“末田”“深田”を計測した面積にそれほどの開きは認められない。しかし、河川沿いの「飛鳥神田」や「島川神田」では計測値と記載値に開きが顕著となっている。ホノギ図に描かれた河道は、『長宗我部地検帳』の時期にはもっと不明瞭であったのだろう。

(注4) 『長宗我部地検帳』に名前が見られる給人集団で出現頻度が高い人物が長宗我部家臣団の中の有力者と見て良いだろう。「香我美郡山田郷ノ内董生谷検地分」には董生郷の検地結果がある。この中の“吉野ノ村”に



は給人に野中三良左衛門の名前が見られる。また、『安芸文書』(第五冊)には末久儀運氏の注釈で“元親の国政奉行”と見える。『地検帳』山田郷林田村の記載には“人蔵谷同し上野中肥後新開”とあり、給人に野中弥吉郎の名前がある。『長宗我部地検帳 香美郡 下』の横川末吉氏による解説や『土佐山田町史』を参考にすると、野中肥後守は野中三良左衛門の父で、豊前の人、並生郷の代官を勤めた人物とされる。

以上、『地検帳』で調査地点とその周辺の当時の様子を見てみた。早い段階で西の赤岡と東の姫倉城下には街並みが成立していたと考えられるが、それを繋ぐ部分は現在の景観とは異なるもので、塩浜やそれに関わるヤシキ等が存在した程度である。第1章でも触れたように岸本・赤岡両地域は砂浜の発達に伴ってその姿を変えて来たと考えられ、現在の両地域の景観も、『地検帳』以降の自然営力に因るところが小さくない。

今回の調査の切っ掛けは津波避難タワー整備である。太平洋岸に位置する岸本地区は東南海や南海地震とそれに伴う津波の被害を受ける可能性が高く、江戸時代に於いても1707年の宝永地震・津波、1856年の安政地震・津波の被害を受けている。その様は文献はもとより石碑などとして多くが現存している。先人はこれらの記憶を止めることで子や孫に何を伝えようとしたのであろうか。最後にその一部を掲げて結びとしたい。

#### (宝永大地震)

同四日、未上刻国中大地震、未下刻より寅刻迄津波打寄る事昼夜十一度也。中ニも第三番目の浪甚高し。

##### 香我美郡

手結 亡所。潮ハ山迄、山上家少残。

下夜須 半亡所、横濱知切之家ハ悉流。潮ハ大宮之庭迄。此浜之笠松流。屈枝蟠根、無双之名木也、可惜。

岸本 亡所。潮ハ山迄。

王子 潮ハ田町迄、家ハ山下ニ有故無事。

赤岡 潮ハ在所無残、流家三ヶ一。

古川 半亡所。流家無。

吉原 亡所。濱之並松之外ニ古田出る、畔の形顕然たり。地宅反斗ハ並松の西之端ニ有、庄屋敷敷より申西ニ当。庄屋敷敷ハ古之土居跡也。地廿代斗ハ並松東の端少西へよりて、同所より辰巳ニ当る。里人云、此所沙濱も高潮推剥推流れハ、今にしてハ此古田の幾ハく底より出たるといふ事不知。但此松杉は昔より當所の墓地にして、常に七八尺掘るといへ共終に如斯の土なし。爰を以相計れハ、深サ老丈の内ならん。今按ニ、右之古田秦氏の地検帳ニも不載、何れの代設せしといふ事も據なし。上ニ三圍の松樹生立ぬれハ、決して三四百年來の物にあらず。

野市 潮ハ芳原境迄、家少流。

物部 三ヶ一亡所。

久枝 同。

上田村 在家中半迄潮入、流家少。

下田村 同。

下嶋 亡所。

前濱 半亡所。

(『南路志』7 p63・64)

### 惣誌

誌には由断大敵とハ深意あることにて仮初めニおもふへからす安政元年寅年十一月の事なり朝五時頃常に覚へぬ程の地震して岸本の浦塩のさし引き十間余の違あり又手結の湊浦内も干揚がりて鰻をうるることなど夥し同日再度小震すしかハあれとさはかり驚く人もあらざりしを翌五日八時過大に震動すること三度七時過大雷鳴の如きどろどろと響くとひとしく大地震わすこハいかにて衆人驚く程こそあれ家蔵高榊器物崩れ破るる

音さら二いふ斗なし逃んとすれども目くるめきて自由ならずほうおう家を出けるに津波打来りて當地は徳善町より北の田中赤岡ハ西濱並松の本古原ハ庄屋の門までに及ひ又川尻の波ハ赤岡神輿休のほとりまでにいたり古川堤夜須堤も押切られて夜須の町屋など過半流失すかくて人人ハ老を扶け幼を携へ泣叫びつつ王子須留田又ハ平井大龍寺の山へと逃げ登りて命助かりぬ此時國中の官舎民屋多く転倒し就中高知下町幡多中村ともに失火ありて一圓焼亡し凡て怪我横死何百人といふ事なし幸甚なるかな此地ハ神祇の加護によりて一人の怪我もなく彼山山ニ己家をかまへ日を経るに隨いて震もいささか穏に成しかハ恵あまねき大御代の忝を悦つつ皆己か家に帰りきぬ抑宝永四年の大變ハ今をさること百四十八年年になりぬれハ又かかる年数にハ必變事の出こんなどいふ人もありなめと世變いつあらん事予めしりかたしされど常ニ菟あらん時は角と用心せハ今其變にあいても狼狽せざるへし

今の人人寛永の變を昔はなしの如くおもひて既に油断の大敵にあひぬざるによりて後世の人々今の變事を又昔咄の如くおもひて油断の患いなからしめんためことよしを石ニ刻りて此御社と共に動きなく萬歳の後に傳へんとふるいおこしたるハ里人か誠心のめてたき限りにぞありける千規たまたま高見の官舎に紙役して、俱に彼の變事に遭たれハ其よし書てよと人々の乞ふニまかせてかくハ記し侍りぬ六賢  
安政五年戊午季秋數日

徳永千規 誌 前田有稔 書 澤村虎次 刻

### 参考文献

- 『長宗我部地檢帳 香美郡 上』高知県立図書館 1962年
- 『長宗我部地檢帳 香美郡 下』高知県立図書館 1962年
- 武藤致和集『南路志 2』高知県立図書館 1991年
- 武藤致和集『南路志 7』高知県立図書館 1997年
- 『赤穂市立海洋科学館研究資料 八 塩のはなし』赤穂市立海洋科学館 2000年
- 廣山龜道『日本の製塩法』『赤穂の文化 研究紀要 第5号』(財)赤穂市文化振興財団 2003年
- 『土佐山田町史』土佐山田町 1979年
- 『香我美町史』香我美町 1985年
- 『歴史考古学を知る辞典』東京堂出版 2006年
- 谷川健一『列島縦断 地名道遣』富山房インターナショナル 2010年
- 高橋史朗「高知県香美郡下の物産の紹介-明治12年における-」『土佐の諸問題』名著出版 1978年
- 香崎和平『土佐名鑑』にみる明治期の酒造業界について』『土佐地域文化 第10号』土佐地域文化研究会 2015年
- 『歴史探訪 南海地震の碑をたずねて 石碑・古文書に残る津波の恐怖』毎日新聞社高知支局 2002年

# 写 真 图 版



調査前(南から)



調査前(北から)



調査開始(東から)



SK1・2検出状態(東から)



SK1・2検出状態(西から)



SK2(東から)



SK2底板出土状態(北から)



SK2完備状態(南から)



SK2完備状態(東から)



SK3検出状態(北から)



SK4検出状態(東から)



SK3半截状態(南東から)



SK4半截状態(東から)



SK3・4完掘状態(西から)



SK5・6検出状態(西から)





SK5・6半截状態(東から)



SK5・6完掘状態(東から)



SK7検出状態(東から)



SK7検出状態(北から)



SK7石組み出土状態(東から)



SK7石組み出土状態(南から)



SK7石組み出土状態(南東から)



SK7石組み出土状態(東から)



SK7石組み(東から)



SK7完掘状態(南西から)



SK7石組みの下層(西から)



SK7完掘状態(西から)



SK7-1半截状態(南西から)



SK8検出状態(東から)



SK8検出状態(南から)



SK8-1半截状態(東から)



SK8-N完掘状態(西から)



SK8-N完掘状態(北から)



SK8-S完瀬状態(西から)



SK9・18検出状態(北西から)



SK9・18検出状態(北東から)



SK9検出状態(南から)



SK18検出状態(南から)



SK19半截状態(北から)





SK10検出状態(東から)



SK10検出状態(南から)



SK10半截状態(東から)



SK10完掘状態(北東から)



SK10完掘状態(西から)



SK10下層半蔽状態(東から)



N区完掘状態(北から)



N区完掘状態(東から)



N区完掘状態(南から)



N区北完掘状態(西から)



N区南完掘状態(西から)



S区完掘状態(西から)



S区完掘状態(北西から)



S区完掘状態(北東から)



S区西半完掘状態(南から)



SK11検出状態(西から)



SK12半載状態(東から)



SK11検出状態(南から)



SK13検出状態(西から)



SK11-1検出状態(西から)



SK13半載状態(東から)



SK12検出状態(西から)



SK16検出状態(南から)



SK15半截状態(南から)



SK17半截状態(北から)



SK16検出状態(南から)



SK20完相状態(西から)



SK16半截状態(南から)



SK21半截状態(西から)



SK16完相状態(東から)



調査S区南壁(北西から)



岸本小3・4年生見学



現地説明会



現地説明会



埋め戻し作業



調査終了後







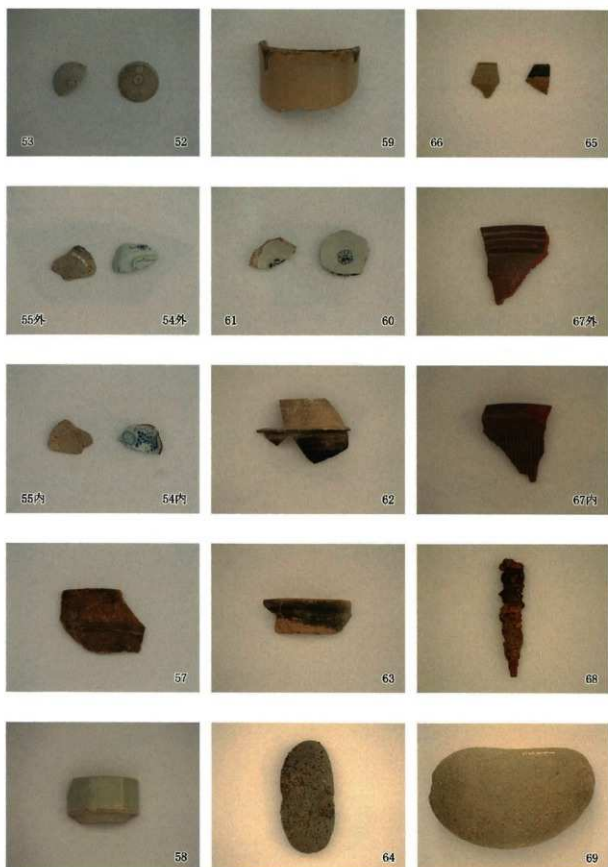
遺物写真 1





遺物写真 3





遺物写真 5

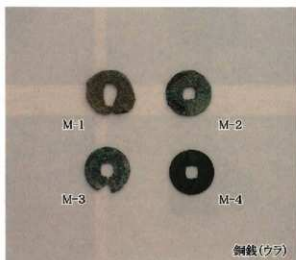
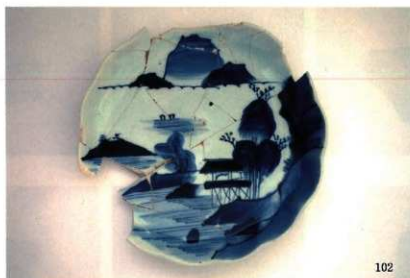












# 報告書抄録

ふりがな	きしもとあすかじんじやにしいせき							
書名	岸本飛鳥神社西遺跡							
副書名	岸本1区津波避難タワー整備に伴う発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	高知県香南市発掘調査報告書							
シリーズ番号	第13集							
編集者名	藤方正治							
編集機関	高知県香南市文化財センター							
所在地	〒781-5453 高知県香南市香我美町山北1553-1 Tel.0887-54-2296							
発行年月日	西暦 2016年3月31日							
所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° / ′ / ″	東経 ° / ′ / ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
きしもとあすか 岸本飛鳥 じんじやにしいせき 神社西遺跡	こうちけんこうなん 高知県香南 しがみらちょう 市香我美町 きしもとのまる 岸本リノ丸	39211	80062	33° 32′ 29″	133° 43′ 46″	試掘調査 H.27 1.5~1.8 5.14~5.18 本調査 H.27 5.19~6.19	約200	津波避難 タワーの 整備
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
岸本飛鳥 神社西遺跡	集落遺跡 生産遺跡	江戸時代		土坑		近世・近代陶磁器		
要約	<p>古代の土器と江戸時代から現代までの遺構や遺物が出土している。主な遺構は土坑であり、土質的性格のものや廃棄目的のものがある。特異なものとしては、石組みを施した半地下式の炉の様なものや小型の生業に関わる土坑群である。</p> <p>調査区は飛鳥神社の西隣であり、旧街道に沿う位置であることから、岸本西部の集落変遷を示す一例と考えられる。</p>							

高知県香南市発掘調査報告書第13集

## 岸本飛鳥神社西遺跡

－岸本1区津波避難タワー整備に伴う発掘調査報告書－

---

2016年3月

発行 高知県香南市教育委員会

香南市文化財センター

〒781-5453 高知県香南市香我美町山北1553-1

TEL 0887-54-2296

印刷 香南市野市町西野 2114-1

岩神印刷株式会社